冬雷

短歌雑誌　TOURAI

5月号・2024年

二〇二四年五月一日発行（毎月一回一日発行）第六十三巻第五号（通巻七四七号）

お知らせ

今月号より誌面のレイアウトを一部変更した。《作品欄の活字の大型化を実現した》というのは小誌の誇りなので、それについては堅持したい方向は今後も変らない。変更はぎりぎりの対応である。

出詠者一三〇名ほどの結社誌としては、従来の総ページ数はやや規模不相応であった。そういう指摘もあって、今後は通常号の目標を64ページから72ページとして、月刊誌刊行を継続したい。ささやかな倹約ではあるが、この程度のものでも年間に20から30万円の経費減は見込まれる。

しかし投稿規定にもあるように、自由投稿は認められているので、会員の研究や実験の発表の場であることに変わりはなく、いつでも窓口は開放してある。

今月号で巻頭の連載「ＤＴＰで冬雷を作る」が完了するので誌面の変更をはかるには良いタイミングだった。この組版技術を編集部で共有し、活用し、健全なる短歌雑誌運営の基として行けたら幸いと考える。

会員の皆様のご理解、ご協力を冀う次第である。

《冬雷短歌会》

５月号　目次

ＤＴＰで「冬雷」を作る―組版のすべて―（最終回）……〈冬雷編集室〉…１
冬雷集……９
作品一……24
五月集……40
残響集……46
作品二……56
作品三……66
三月号冬雷集評……山本三男…22
島木赤彦の一首鑑賞３……小林芳枝…23
三月号作品一評……・小林芳枝・藤田夏見…38
三月集／残響集評……ブレイクあずさ…45
『四斗樽』刊行以前の太田行蔵(3)……大山敏夫…48
三月号作品二評……井上菅子・江波戸愛子…52
三月号作品三評……桜井美保子・橘　美千代…54
三月号十首選（冬雷集・三月集／残響集）……56
三月号十首選（作品一・作品二・作品三）……58
歌集・歌書紹介……佐藤靖子…61
歌会設立こと始めの次第……新井光雄…64

表紙絵《月下美人》嶋田正之／題字　田口白汀

DTPで「冬雷」を作る（最終回）

―組版のすべて―

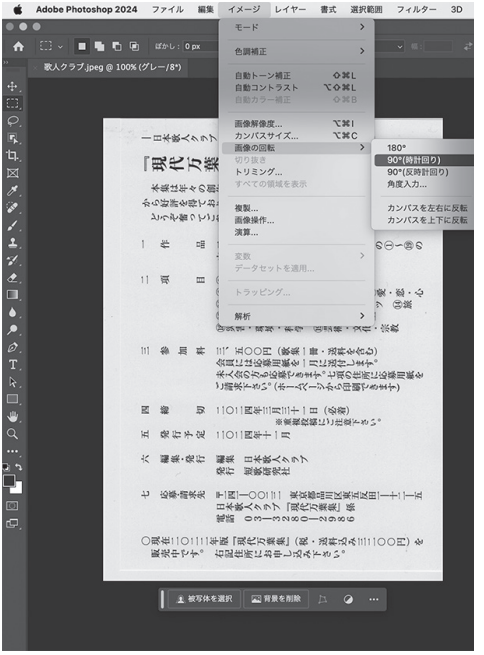
《冬雷編集室》

今回は画像の作り方を述べる。「冬雷」では画像を比較的多く使っているので、画像の加工を行うアプリ「フォトショップ」も、最低限度の知識が求められる。

画像には写真もあるが、外部から掲載を求められる紙だしの広告記事（版下（はんした）という）等もあり、通常誌面に掲載ならカラーでの知識は不要なので、基本的に作り方は同じである。いずれも電子メール添付で貰う場合は、それを開きパソコンに保存すれば良いが、郵送等で来るものは、当方でスキャンしてデータ化する必要がある。

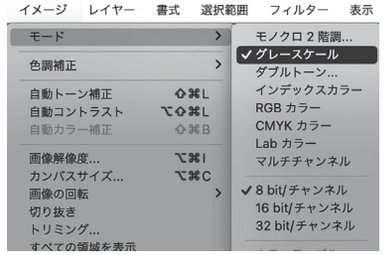
編集室の設備では、スキャンはパソコンに接続してあるので、まず、スキャナーに写真や版下をセットしてから、パソコンメニューの「システム設定」→「プリンターとスキャナー」→「指定スキャナー」の順に選択し、「開く」をクリックするとパソコン画面に取り込んだスキャナー画像が表示される。画像の内容に沿って、適度な諸設定をして対象枠を指定して「スキャン」を選択すれば簡単に取り込める。

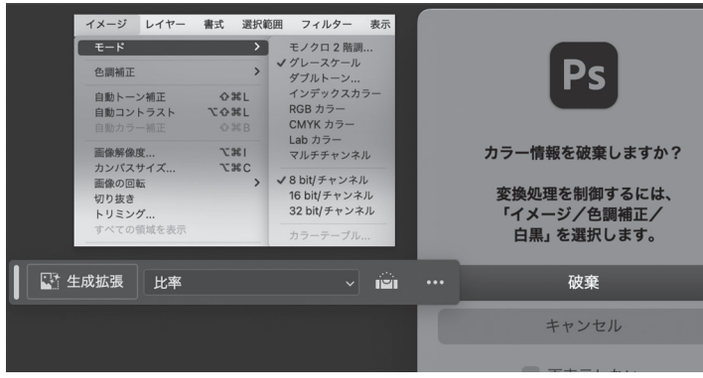
ここでは保存された画像をフォトショップで開き、掲載可能なレベルのものに作り変える操作を簡単に説明することにしたい。素材は「現代万葉集募集要項」広告とする。まずフォトショップを開き、画像を表示させる。

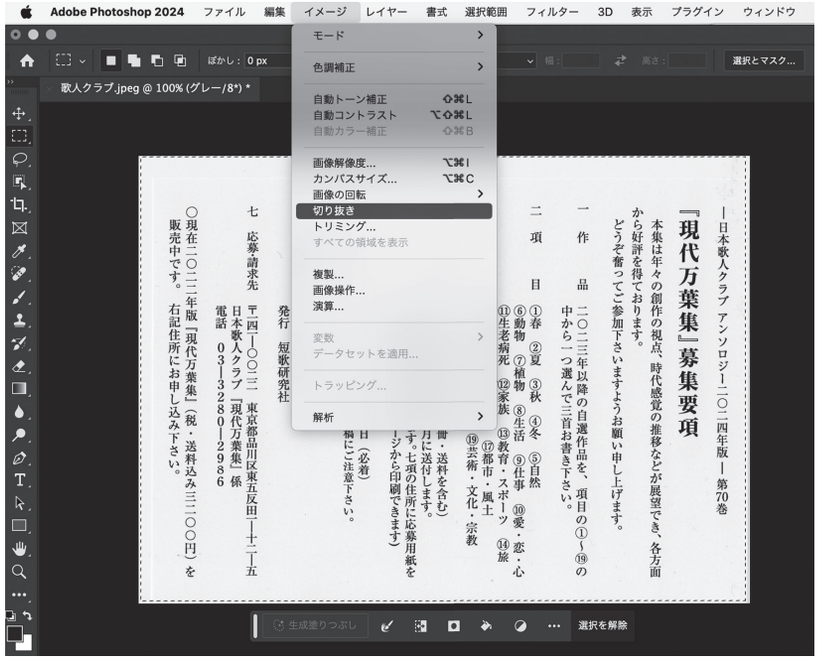


フォトショップメニューの「イメージ」からすべてが始まる。保存画像が縦表示になっているので、これを回転させて横表示にする必要がある。右は「イメージ」→「画像の回転」→「90度（時計回り）」を選択したところである。「イメージ」には他にも「モード」「色調補正」「画像解像度」「切り抜き」などの必須設定項目が含まれるので、順に紹介したい。

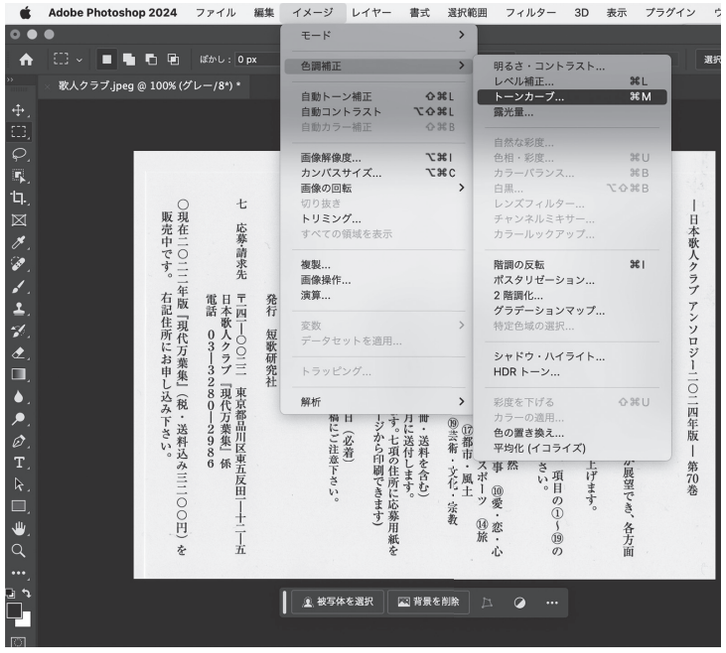
「モード」→「グレースケール」と選択して画像から「色情報」を抜く作業をする。本誌用なら色を抜いたグレースケールとする必要がある。仮に印刷用カラーデータを作るなら、項目から「CMYKカラー」選択であり、ネットへのアップ用なら「RGBカラー」となるのだ。ということで、グレースケールを選択すると右画像下のように、「カラー情報を破棄しますか？」の表示が出る。ここでは「破棄」をクリックする。その画像を「切り抜きツール（ ）」で四角く囲む。そして「イメージ」→「切り抜き」と選択（左画像）。



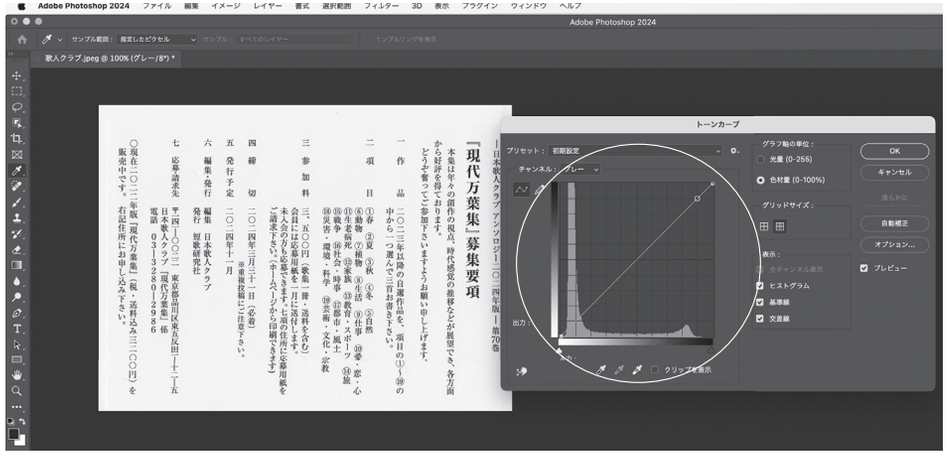


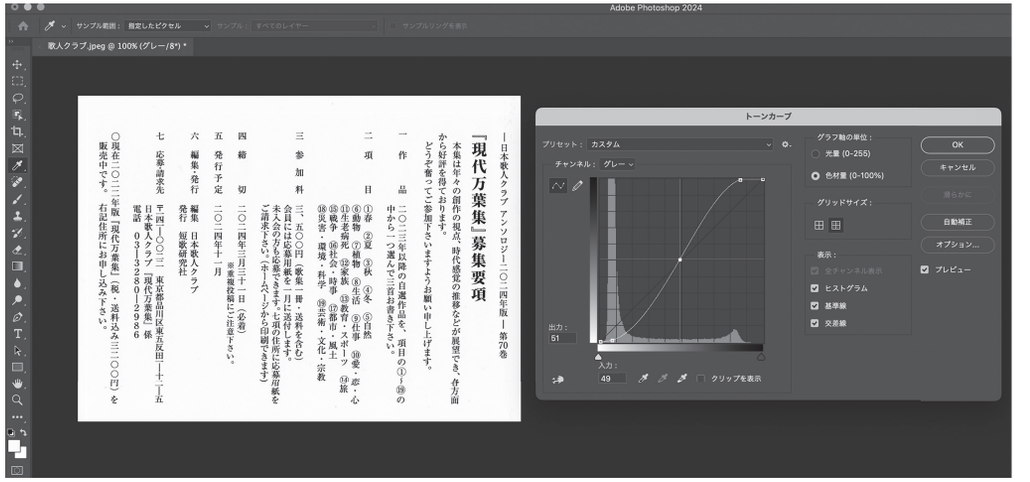


画像は指定通りに切り抜かれた。続いて「イメージ」から「色調補正」を選択し、特に色の設定はないので「色調補正」の隠れメニューから「トーンカーブ」をクリックする。左の画像である。



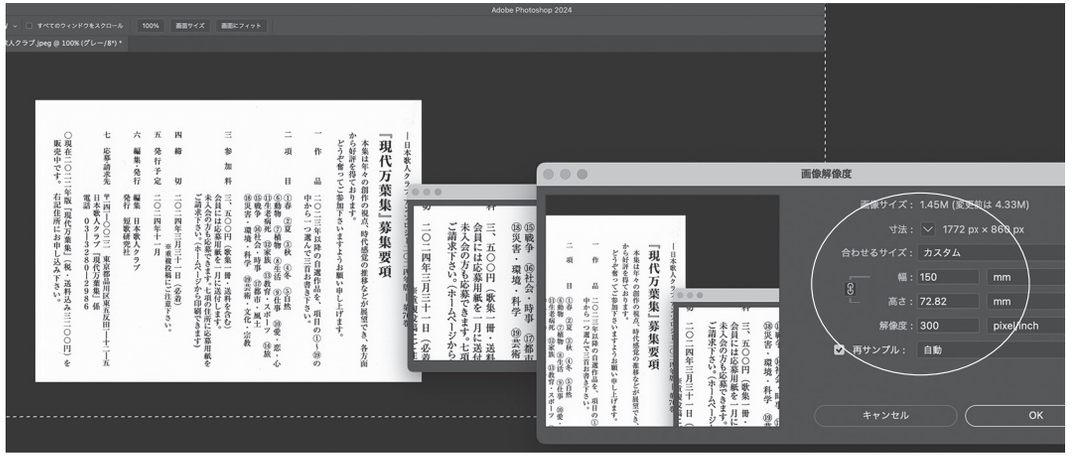
そして上画像が表示される。マルで囲んだところがトーンカーブとなる。「プレビュー」オンなので、操作が即画像に反映する。カーソルで左の版下の適当な場所をクリックすると、右のトーンカーブの斜線上のポイントにその位置が出る。トーンカーブは左下が最も薄い点で、右へ行くほど濃い点に変わって行く。紙の地をクリックすると左端の大きなピーク波を示し、文字面をクリックなら右側の小さな波をさし示す。





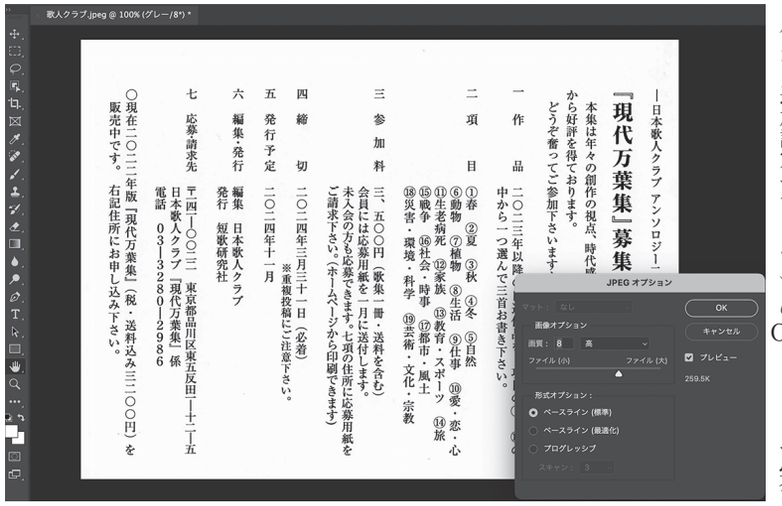
文字ものの広告なので、文字をはっきり表示させて地の白を出来るだけ明るくさせるのが良い。という意図のもとに、上の画像のように設定した。トーンカーブがS字状に変わっているのが分かる。これでKOクリックで確定する。

続いて画像解像度設定へと移る。「イメージ」→「画像解像度」と選択して行く。そうすると下の画像が出てくる。一番右側のダイアログにおいて細かい設定を行う（マルで囲む箇所）。



上画像のマル囲みの中の「解像度」「300」と設定。この数値は決して高いものではないが、グレースケールの印刷では、これ以上高くしても結果に反映する事はない。いたずらにデータが重くなるだけだから「300」を覚えていてほしい。

続いて画像の縦横のサイズの指定となる。どちらかを設定すれば比例して動くことになるので、縦の方を横長画像なので150ミリと定めた。このサイズはアバウトで良い。



これで諸設定は終了となる。最後に「ファイル」から「保存」ないし、「別名で保存」を選択して左画像のダイアログ（特に何かを追加設定せずと良い）のOKクリックで完了である。

残すは「下版」後の印刷、製本について簡単に触れたい。プレス後の工程も簡単ではないのだけれど、専門外なので詳しく分からず、知る限りのアウトラインを述べるに止まる。その工程は次のような流れである。

①下版用ゲラ刷りをチェックして効率の良い印刷手順を計画し、印刷機械台割（だいわ）りを作る。「冬雷」はA5判なので、用紙はA判サイズの全紙（ぜんし）、または半裁（はんさい）を用いることになる。全紙で表裏32ページが印刷できるのであるが基本的には、1折16ページの面付（めんつ）けとなっている。したがって全紙で刷る場合は、2折分付け合わせとなる。印刷現場では、本刷り前に必ず刷本（すりほん）を手で折って「折丁（おりちょう）」を作りノンブルが正しく繋がることを確認する。

②印刷が済むとインキの乾き具合を見ながら、刷本を折機に掛けて、16ページ単位の「折丁」を作り、すべての印刷がおわり、製本機に掛ける時には、この「折丁」を順に並べ合わせる「丁合（ちょうあい）」工程が入る。

市販される書籍の分厚い物なら、結構な数になるので、その丁合された姿を見ると、ある意味美しささえ感じるのである。「冬雷」での丁合が左画像。マルで囲む中に長方形の背（せ）標（ひょう）を1折から順に並べて揃え、目視で確認可能にする。

前のページに背標の綺麗に並んでいる丁合の画像をのせたが、仮にこの背標の順番が狂って列が乱れてしまった場合の不良品を「乱丁」と言い、或いは、途中に背標の欠落があって綺麗に並ばない時の不良品を「落丁」と言うのである。いずれの場合も、本文のノンブルが通らない不良品となる。

各折ごとの背標には、本の題名と1折とか2折とかの文字情報も付いて、それら全体を「背丁」と言う。こうした諸々の情報は、印刷所に於いて行う面付け作業の中で付けられる。印刷機台割りに沿った面付けは、専用のソフトがあるのだが、実を言うと、現在の「インデザイン」には、面付けまで行える機能が備わっているのである。

④頁	⑤頁
⑬頁	⑫頁
⑯頁	⑨頁
冬雷　1折 ① 頁	⑧頁

上図のマル囲みが「背丁」となる。

⑥頁	③頁
⑪頁	⑭頁
⑩頁	⑮頁
⑦頁	②頁

上の図は、「冬雷　1折」と題名を入れ、長方形の背標を入れた16ページの面付け状態である。背丁のついた方が表面となり、表8ページ裏8ページを袋状に配置してある。表面の背丁を下側にして仕上がりトンボを合わせつつ半分に折り、時計回りに回転させ、背丁面を下にして半分に折り、再び回転させて、背丁面を下にして半分に折れば16ページの折丁が出来上がる。繋がっている折られた箇所をペーパーナイフで切り開けば、ノンブルの通り具合を確認出来る。

「冬雷」のように少部数で且つ薄い冊子は、通常枚葉印刷機で刷るので、必ず、それを「折る」という工程が必要となる。枚葉紙ではなくロールで刷る輪転機ならば、折り工程までが連続して行える。さらに進化したデジタル輪転印刷機なら、印刷から製本まですべてインラインで済ませてしまうものもある。用途別に最善の選択が行われる。

冬雷編集室では、印刷所へ渡すまでのデータを制作しているので、面付けから製本までの工程に関与しない。後工程で仕事がスムーズに流れない不備をしないことだけを心がければ良いかと思う。

仮に、印刷製本までを目指さないペーパーレス雑誌を作るということになっても、ＤＴＰによる編集や組版は同じなので印刷前工程さえきちんと管理できれば、その時の状況に応じた対策は可能なのかと考えている。

月々に「冬雷」を制作し、交流する外部の結社誌を頂いて拝見する生活の中で、いつも考えるのは短歌雑誌の今後という問題である。結社誌それぞれの抱えているものは表面化しないので悪い面は見え難いが、同規模の結社ならたぶん実情に違いはないのかと想像できる。本稿も、厳しい結社誌運営の環境を予想して状況打開のために打ち出した対策の一つだったのであるが、これを実現すればすべて解消ということにならないほど、与えられている環境に厳しさがある。

最も対策不可能な点は雑誌を宅配するというサービスであろう。これだけはどのように工夫しても経費削減の方法がない。仮に雑誌を作るということだけなら、現在の会費規定の中で十分に賄えるものの、雑誌の制作費単価と、雑誌の宅配費単価がどんどん近づいてくることを思うと恐怖すら覚えるのである。

そこで浮上するのが雑誌を電子書籍化してデータの受け渡しで運営するペーパーレスとなる。この方法を用いるなら、先ず印刷製本制作費が無くなり、且つ、宅配の悩みも解消され経費の大削減に繋がる左団扇運営になるのかと思う。既述したようにペーパーレス化するにしても、ＤＴＰで雑誌のデータを作ることは必須なので、本稿で実践していることは無駄にはならない。

こうして諸々考えると、おのずから弱小結社誌の行くべき道は見えてくるのかと思う。従来通りに堂々たる結社誌運営を継続するのは、会員五百名以上の大結社に任せて、その他多くの弱小結社誌は、ペーパーレス化された結社誌間で共有可能な新システムを構築して、データでの遣り取り交流の、新しい時代へ踏み出すような試みが求められるのではないか。それでも紙の雑誌が欲しいという方には、オンデマンドで極少数制作し渡すことくらいは決して難題ではない。

雑誌を作るということと、短歌作品を作るという営為がだんだん乖離して行き、全く違うことで頭と身体を使うようになっているのがしみじみ感じられる昨今である。作歌を志した少年時代には、想像すらしていなかった現在の自分の姿にしばしば愕然とする。

印刷用データの内製化する場合に、まず何から手をつけたら良いのか。

あらためて質問を受けた。これは本稿最初に述べたところの「手書きのアナログ原稿をどのようにしてデジタルデータ化するか」に尽きるのである。ここを実現せねば、その先など有り得ない。「冬雷」が内製化して十八年目を迎えられるのは、この点を何とか自前で達成しているからだと思う。むろん、筆者一個人の頑張りだけで可能なことではないので、担当選者の努力、延いては会員の皆様お一人お一人の有難いご協力の賜物であることに思いを馳せ、ここに幾重にも謝意を表する次第である。

《完》

●通しノンブルの設定

先月号本欄で説明の漏れた大事なことを書いておきたい。左はページパレットの本文ページ画像である。

基本設定でページノンブルは自動的に付けられ、画像のように必ず「1」から始まる。しかし、これが違うブロックでの作業があってそのデータを開く時に、そのデータの方も奇数ページの「1」から始まったのではノンブルが通らぬことになるので、そこを調整せねばならない。そこで使われるのが次の機能である。

先月号にて使ったデータを画像にして説明したい。先月号では、このブロックでのページノンブル開始が「54」（マル囲み）であったが、仮にここが「50」ページに変わった時の対応である（偶数ページ設定なら見開き表示）。右画像は先ず先頭のページを選択しておき、パレットメニューから「ページ番号とセクションの設定」をクリックした場面。

すると次の画像の設定ダイアログが表示される。そこに必要事項を入れれば良いことになる。

画像では「54」とある箇所（マル囲み）の中を、指定の「50」に打ち直し、OKをクリックすれば反映される。先頭ページが「50」となって以後のページもそれぞれ自動的に連結されるのである。まったく簡単な操作だけれも、これが出来ないと、複数ブロックのデータが繋がらないことになり、重要なところなのかと思われる。

冬雷集

ドローン

大山敏夫　埼玉

日日動く戦局を報ずるYouTube 大きく変化せず最前線は
ウクライナの公表するいち日いち日の動きは概ねロシア軍劣勢
物量に兵力に勝るロシア軍突進を続け戦死者多し
ドローンの編隊爆撃にロシア軍兵器工場燃え製油所燃ゆ
ドローンの迫るエンジン音重くひびき爆撃機襲来に変りなし
ドローンは空にも陸にも海中にも動きまはりて破壊繰り返す
撃墜さるるドローンの数も増えゆけど兵の損害なく成果限りなし
クリミアに架かれる橋は破壊され修復不可のまま膠着しをり
専守防衛の日本国にてもドローンの独自兵器化へ急ぐ気配あり

老のたはごと

赤羽佳年　東京

これまでも幾たびありし禁煙の今の挑戦が最長三年
おとろへは足腰のみに留まらず視力衰へ眼鏡を替ふ
口腔に渇き覚えて夜寒覚むそれよりのちの数十分覚む
枕辺に置けるボトルの水を飲む室温の水喉を潤す
焦点の定まらぬままパソコンのモニターに向かひ時間費やす
窓近くもみぢ散る昼蕎麦たぐる今は生蕎麦パックの一把

己が歳考えるとき出来ぬこと当たり前にして思考を止める
これからの老いを活かしてどう詠ふ初めてのこと戸惑ふばかり
若き日の非礼許せよ交はりを残しし者に謝るばかり

赤　間　洋　子　東京

藍染の雛人形の壁掛けを飾りて祝ふ我が雛祭り
落す零す仕舞つたものを探すこと嘆く己に感じる老を
嘆くこと我も同じと友云ふがそれでも悔しと思ひつつ暮す
一人暮し数へてみれば二十一年自立生活できる幸せ
景気付けに少し贅沢せむと思ひ献立考へスーパーに向ふ
あれもこれもつい手が伸びて籠に入れ買ふべきものを忘れて帰る
魚河岸に勤める教へ子のLINE情報鰯が美味いとあれば求める
求めたる鰯は頭と腸をとり圧力鍋で煮て骨まで食す

兼　目　久　栃木

食事より暖かく寝る方がよいと言ひたる能登地震の女(ひと)は
元旦に喜びあふれる団欒を過ごせる中に地震に襲はる
倒れてゐるビルを眺むれば地中に斜めにつきさす如き光景
信号に雀二羽止まりをり車と同じく信号を待つ
十年間使ひ古したる筆なのに弾力ありて幅を書きをり
厠に行き真冬の寝床は寒かりし湯たんぽまされば暖まりくる
冬季間も育つてゐるのか小松菜は淡い薄日を受けていきいきす

空海は線に重みあり最澄は清らかな線でやさしき筆跡

山　﨑　英　子　東京

医院への道に咲く花臘梅の淡き黄の花身近に春を
低き枝引き寄せ楽しむ花の香に遠き日思ふ誰彼となく
雛祭り祝ひて送り下されし「せとか」なるオレンヂその甘さ
心遣ひ細かき姪に励まされしつかり生きねばと思ふひとときき
変り無き日々の暮しになごみ見るいつも来る数羽のカラス
特別に仲良きカラスらしいつも二羽揃ひていたはる如し
朝よりの雨に木の芽の赤らみがびつしり目立つしだれ桜に

森　藤　ふ　み　東京

迷ひつつ東京マラソン見にゆかず木場公園に花を眺める
残り野菜あれこれ入れる味噌汁の薄切り蓮根しやきしやきとして
満開の河津桜の花ちらし吹きゆく風のことさら冷たし
強風に吹かれ川面を流れゆく桜の花びらひとかたまりに
新のつく泥付き牛蒡人参を久しく作らぬきんぴらにせむ
月一度ランチを共にする長女今年は五十歳になると言ふ
子と同じ五十歳の雛人形欠かすことなく飾り来たりぬ
スカイツリー背に花壇の満開の菜の花映るテレビニュースに
シーサーの睨み

櫻　井　一　江　東京

乗り継ぎの那覇の廊下に胡蝶蘭めいつぱいに花咲かせをり

街路樹に八重山ヤシの並び立つ石垣島に踏み入る一歩
サトウキビ畑続く西表島をガイド兼ねつつ運転手のユーモア
鬱蒼と続く仲間川マングローブ林の倒木そのまま保護区域なれば
水牛車に乗り由布島への浅瀬行く馭者は三線持ち出し島唄うたふ
由布島の蝶々園の一つ所オホゴマダラが集まり来て飛ぶ
静かなる竹富島の集落の赤瓦の屋根にシーサーの睨み
川平湾の青き海中遊覧にサンゴ群れ魚群れ亀らに平和の影

冨　田　眞紀恵　富山

遠い日の祖父母の声を思ひ出し今日は楽しい節分です
姉二人妹一人にかこまれて過ぎし少女の日々なつかしき
一つ二つ豆をかぞへる声声か遠く聞こえて節分である
家のこと息子にまかせて老吾の施設のくらしも長くなりたり
久々に息子の声を聞いた日はうれしい様で少しさみしい
居なくても居てもどうでも良い吾もやがては居てはこまる人かな

有　泉　泰　子　山梨

マンションの建設工事の始まりて隣の空地に県外車並ぶ
工事車で賑はふ空地も土曜日の夕べは静まる家に帰るらむ
工事の終り隣の空地静まりぬ猫が一匹ゆつくり散歩す
三鷹駅で乗り換へ向ふは市川ぞ妹の住む町義弟病みをり
吉祥寺阿佐ヶ谷荻窪中野駅なつかしき名よ通学したりき

錦糸町両国亀戸なつかしや父勤務したる地一度共に歩きし地
自信持ち一人で来たるも迷ひたり行き会ふ人の優しさに触るる
義弟の声はいでぬも穏やかな笑顔もみせて意志表示する

青　木　初　子　神奈川

隣家の媼の愛でし庭の木々ショベルカーにて倒されてゐる
大王松柿の木椿金木犀掘る音の怖し幹の太きに
二三日待てば満開の枝垂れ梅早ばや伐らるる家解体に
片付けをせぬまま媼倒れゐて家具の全てを処分されをり
解体の前に出されし家財家具トラック三台三日をかけて
形よき石を積みゐし築山の崩され皐月牡丹見られず
庭内に大型トラック二台止め二階建ての家解体始まる
路地一本隔ててをれど解体の音響きゐて我が家を揺らす
隣家の百坪の土地売られゐて三軒の家これから建つと

黒　田　江美子　千葉

クラス会の通知に遥か十代の在りし日浮かぶ心地好き記憶
五年振りの今年なほさら温もりに満ちた会をと幹事の言葉
思慮深き幹事の元に五十余年会は和やか常に愉しき
火災記事に出火原因の記載なく焼死の報に高齢者多し
テレワークに配線器具の出火事故増えたると聞く身近な危機なり
自己管理にスマホアラーム設定し不意の鳴動慣れず驚く

手仕事に明け暮れと姉送り来る母の着物を作務衣に変へて
リメイクの肩掛けカバンは椿柄姉の手により帯地の活きる

中村　晴美　茨城

キッチンの収納物を取り出していよいよ明日はリフォーム初日
デリバリーのピザはチーズの量の減り質の劣化すこし数年に
家周りのコンクリ片をかき集め産廃コンテナへ投げ込みスッキリ
リビングにキッチン用品冷蔵庫慣れぬリフォームの一週間なり
最初であり最後であらうキッチンのリフォーム果たす還暦のわれ
大鍋も汚れし皿もピカピカに海外製は別格なり
海外製食洗機は快適なり子育て世帯に必須と思ふ
白く垂るスノードロップの花の咲くキッチンリフォームに忙殺の中

山口　嵩　福島

自転車を肩に尾根道あゆむ人四十若くば真似たき一つ
急坂を駆けて下りしときもあり辺り眺めつつ今は下れり
本格カレーを初めて食べし中村屋新宿界隈高層ビルなし
晩酌は週に四日の宣言もけふは雪見と一合燗す
人生を詩の一編と思ひたき最終行にはQue Sera Seraと
裸木の影はしだいに伸びゆきて細流（せせらぎ）わたり畑で失すめり
吾妻より茜のベールが町おほひ「生みたーて、たまご」の売り声のどか

吉田　綾子☆　茨城

久々に大地を巡れば我が植えし河津桜の咲き盛るなり
満開の河津桜に早春の大地も一気に活気付くなり
未だなき河津桜の花の色彩やかにして大地を覆う
銀鼠の矛先のごと天を突く白木蓮のあまたなつぼみ
白木蓮の落葉の間にむらさきのイヌノフグリの花をみつける
播種したる如く落ちいる栴檀の数多なる実に避けて通りぬ
ひと冬の積もれる落葉を踏みゆけばカシャコソカシャとリズムの楽し
裸木々の眩しきまでに照り返す春の光に自然は靡く
四季折々の花木を植え在るこの大地嘗ては仔牛の放牧場なり

橋本　文子　鳥取

極寒の災害にめげず助け合ひ希望に向かふ日日の尊さ（石川県）
海近き厳しさ胸に暮らしきて心を強く生くる人々
ミニトマト今年は三月にも採れる少しづつ赤くなりて可愛らし
いつしかに庭の花の芽育ちゐて水仙すつくと咲き揃ひたり
三月十一日東北復興の放映に只々深く敬意を抱く
春休み孫帰省して忽ちに庭の徒長枝始末してくれる

酒向　陸江☆　東京

やんちゃする幼のおらず障子紙貼り替えるなく春の陽を浴ぶ
四人（よつたり）の子等は巣立ちて夫亡くし声出すことの少なき日々
四年ぶりコーラスグループの再開に喜び行けど声の出でずも

足腰の衰え気遣い歩きおれど声の衰え気付かざりけり
娘と共に中尊寺金色堂の特別展へ二時間並んで入館したり（土曜日）
上野にて鎮座ましますお像はいずれのお顔も照明の下
仏像の前から後から眺めては畏れ多しと合掌したり

西の京　天野克彦　大阪

幾たびの訪れならん大池をへだてながむる薬師寺の塔
十年経て甦りたる水煙は古色を写し青空に立つ（令和五年東塔落慶）
春さらば塔に飛天を踊らしめみほとけ讃へ花撒くらんか
固かりし冬木の枝はゆるびそめほのかに紅のめぐりゐるらし（持統桜）
黒びかる艶なる薬師三尊像信なきわれは手を合はすのみ
降りそそぐ月のひかりに笛を吹く飛天をとめをまぼろしにみつ
崩れゐしついぢの塀は直されて招提への道面変りせり
土の道塗り込められて口惜しかも古代の道はここも絶えたり
ここだけは人も疎らにしづかなり鑑真和尚奥つ城どころ

高松美智子☆　栃木

東北の大震災はや十三年ふいを突かれて北陸の災禍
北陸の冬に肩寄す避難の人に湯気立つ豚汁炊き出しの鍋
立ち上げの施設に関わり十年が仲間に恵まれ助けられ来し
「まだやれる」「でも今しかない」恵まれたる職場を退き新年迎える
退職しやりたきことの十あまり箇条書きにして台所に貼る

グレイヘアも選択肢として美容院で髪色明るく冒険のひとつ
スマートウォッチの健康アプリが座りすぎと手首を揺らして運動促す
漱石の「こころ」が今こそ沁みくると七十を過ぎて友は言いたり
最低賃金が一律に上がり五年目も昨日の人も時給が並ぶ

高橋説子　栃木

一晩に塗り直されたる白き文字「止まれ」に補助線しつかり残る
塗りたての白文字「止まれ」の際立ちて車は早目にスピード落とす
飛行機雲を生み出してゐる飛行機を切つ先に認む黒き点として
土覆ふほどに伸びたる麦の間に銀のバッタの卵あるらむ
置き忘れの剪定鋏が見つからぬ切れ味の良い夫の形見の
刺しかけの刺繍もろもろテーブルに広げたるままにできる幸せ
母われといつまで旅してくれるかと娘の横顔見つつ空をゆく
小声にて娘は吾に注意する「声が大きい」「通る人の邪魔」
まさに箍が外れたるごと旅をしていつか飽きるか足萎えが先か

大塚亮子　東京

二階屋に暮らしし事の永かりき吾が十階に仮住まひする
明け方にいつも親しき鳥の声届くことなし十階までは
街中の騒音一切届かずに静もる部屋に落ち着かずゐる
掃除洗濯しつつラジオに泣き笑ひテレビに代はりわが相棒となる
無声映画見てゐるごとし街中の人や車を窓に見下ろす

去年の秋里より貰ひしもち米に牡丹餅作らむ春の彼岸に
大きめの母の作りし牡丹餅の餡たつぷりの旨さ忘れず
母逝きて六十余年黄ばみたる写真手元にわが八十を越す
歳重ね母と紛ひぬ姉の声聞きつつ母の面差し浮かぶ

嶋田　正之　埼玉

ジャンパー

西日受け引き取られゆく自動車のティールランプの滲む雪道
自動車をのけたる場所に子の車当然のごと占領をして
免許証期限切れまで処分せず身分の明しに使ふこととす
暖冬の域を超えたるこの気温夏を想へばげに恐ろしや
誕生の祝ひに貰ふジャンパーは犬の散歩に使ひくれよと
朝朝に我家に預くる習ひにてトイプードルと過ごす週日
食べ物を与へくるるなの指示なれど内緒にリンゴの欠片時折
帰宅して犬を迎へにくる嫁の足音聞きつけ走る速さよ
ふた月に一度の犬のトリミング吾の理髪料二度分を超ゆ

江波戸　愛　子☆　埼玉

警察署まで乗せて行ってと夫言う免許返納決めたと言いて
免許証返してさびしくないのかと訊けばあなたはほっとしたよと
幅広き机も電気スタンドも椅子も娘のおさがり使う
遠くを見る眼鏡ひとつと近くを見る眼鏡ひとつを夫の買いくる
マンションに住むのでいらぬと友は言い石油ストーブふたつをくれたり

あなたは白娘は緑わたくしはしぶい臙脂のストーブ使う
仏壇におわす四人の父と母今日は優しい顔に見えます
冬雷誌積みたるとなりに町会のファイルがひとつふたつとふえゆく
わが家の煮込みうどんはつみれ入りそれも三袋あなたの好み

町田　勝男　埼玉

新年の能登の地変に見るかぎり沈降隆起の祖国は未完か
人々は未完の大地に目移りす地球が駄目なら月も火星も
首相殿今年の漢字もやはり「税」税に無縁は政治家だけです
妻に請はれ包丁研ぐも摩耗した砥石はうすく寿命つきたり
甘噛みのわれの手袋はなさずば主うろたへ愛犬しかる
秋田犬の年齢問へば当歳とまだ子供なり許しやらんか
浅春のひかりのどけき塀際に三度目の播種はうれん草芽吹け
人生の幕切れみえたこのころか明けの寒さにこころ震はす

稲田　正康　東京

春彼岸ジャワの太陽文字のとほり木を垂直に昇りゆきにき
われを見て日本人かといふがありカメラを持ちてゐるゆゑと言ふ
屋上の構築物に挟まれて函に入りたりわが富士が嶺の
広辞苑「蟬」の例示にみんみんのあらぬに気づくあれほど鳴くに
ケーキ持つ老人駅の階段をいたく危ふく降りてゆきたり
正面の壁に戻れる萩すすき左右対称にあらざるところ

先輩と従ひし為事のこと話す五十年ほど前過ぎしことごと
指揮者小沢録音の場を見せなかつたとはげしく言ひきわがスタヂオに

橘　美千代　新潟

ひさしぶりに吹雪の中を車駆く視界ときをり白くかすむも
吹雪くなか連なりバイパスを車ゆくマンモスの群れ地をすすむごと
新しきレシピを料理するは楽しおどろき食べる顔を思ひて
浮腫(むく)むゆゑ左手は布団に入れず寝る骨折してよりこの冬ずつと
子らと猫をりしわが家の思ひ出のもの消えゆけり風呂にソファほか
たちまちに運びさられぬ二十五年使ひしソファ底の修理あと
青みゆく空をカラスら急ぎ飛び去りてにはかに雪降りしきる
医院スタッフの子ら三人の高校に今日合格せり祝福にわく

ブレイクあずさ☆　カナダ

穏やかに春の光を放ちおり封を開ければ歌集『さみどり』
『さみどり』の紡ぐ言葉の柔らかさ悲しきことも楽しきことも
一時間時計の針を進ませる三月十日の土まだ固し
あくびより短き交尾終わらせて鳩の夫婦は日なたに並ぶ
三月の風吹く今日は港まで歩いて行かん歌詠む速度に
町はずれどうということなき道が「侯爵夫人」などと呼ばれる（Duchess Street）
イギリスの王族の名をつけられど霧深き島トーテムの土地

姉川　素枝子　福岡

もろもろの二重に見ゆと嘆かひし母の終はりの齢(とし)にちかづく
障りある様(さま)にみえぬと人のいふ眼に落とす滴つめたし
胸痛くなりて舌下に置く薬小ひさな白き錠剤ひとつ
一日の終はりに唱ふ般若心経よ夜の眠りのやすきを願ふ
はへ取り蜘蛛脱皮するのかしないのか撮み上げたりか黒きものを
しんしんと雪降りつもり遠山をとざす昼すぎの道をきたりぬ
うす紅の梅ほつほつと開き出で春立ち涅槃会すぎゆき早し
猫の歌うたひ息子の笑ひつつ紙袋冠(かぶ)す吾の頭に
かみぶくろ冠せてニヤンと言へといひホホと笑ふにニヤンと応へつ

井上　菅子　山形

虐げられて折れたる葉にも光差し市民農園の雪も消えたり
施設名英語で書かれ訪問の入浴車停まる春の路地裏
二十代の長井紬を今に着る誰も知らない二十のころの
ただ一人残れる兄も耳遠く会話にならぬ面会時間
がちがちに凝りたる肩なり腕なりを持て余しつつ来る誕生日
同居の子居らぬ連休時かけて新聞を読み血圧測る
阿波をどりの踊り手となり生計を立てゐる阿波の益荒男は
たばこの煙染みたる柱義父住みし部屋にわたしの残生はあり
夫が仕事に使ひしペンもマジックも亡くて二年ぞインクも乾く

（☆印は新仮名遣い希望者です）

三月号冬雷集評

山本　三男

歳末の団地に灯油の販売車楽鳴らし来て冬を知らせる　　赤羽佳年

年々季節を感じさせるものが少なくなりましたが、灯油の販売車は冬を感じさせるものの一つです。そういう販売車が来る団地には人々の暮らしがあります。季節感と共に生活感のある歌です。

久々に孫に会へると張り切りて皿に山盛りコロッケ揚げる　　赤間洋子

久々にお孫さんに会える喜びが山盛りという言葉に表れています。作者はお独り暮しのようですが、それだけに人に役立ちたいという思いは強いのでしょう。

目の前のビル屋上にいつも来るカラス二羽程友か夫婦か　　山﨑英子

日常の何げなく目にしている光景を詠んでいますが、作者のお人柄を感じます。この二羽のカラスを見て、友か夫婦かと疑問に思うのは、作者が豊かな人間関係を築いてきたからなのでしょう。

艶やかな黄の花びらと仄かなる香りにしばし寒さを忘る　　森藤ふみ

蝋梅はまだ寒い時期に花を咲かせ、蝋細工のような花びらは良い香りがします。寒さを忘れて蝋梅の花と香りを楽しんでいる様子が伝わってきます。

夢とふは見るものはたまた追ふものかそれとも老いには縁のなきもの　　冨田眞紀恵

小さい頃は誰もが夢をみて、それにあこがれるものです。大きくなると立ちふさがる現実を前にして夢はあきらめがちになりますが、この作者には夢を追いかけた充実した時代があったように思えます。結句は疑問形なのでしょう。過去を振り返っての郷愁と、現在の感傷がよく表現されている一首だと思います。

鏡開き待たずに下げたる鏡餅盆に広げて冬陽に当てる　　青木初子

こん日の住宅環境では、鏡餅を鏡開きの日まで飾ることは難しかったようですが、それほど気にすることもないのでしょう。明るい日射しの中で作業する様子が淡々と描かれている下の句に作者の落ち着いた気持ちを感じます。

惚けは良し死の恐怖の薄れると受け入れ生きた昭和は遠し　　中村晴美

上の句では過去の思いが表現されています。歳月を経た今の思いは若い頃に思ったように単純に割り切ることは出来ないのでしょう。結句に表現しきれない今の思いが詠み込まれています。

すこしだけ心が晴れるすれ違う見知らぬ人がハローと笑みて　　ブレイクあずさ☆

「すこしだけ」というひらがなで書いた初句が効いていて、よく心情の分かる歌です。この月のこの作者の一連の歌の中にあって、ほっとする一首です。

地震ののち降りしきる雪の埋め尽くす傷つきたる街き裂を泥を　　橘　美千代

地震の傷跡の癒えない街に追い打ちをかけるように降る雪の光景を、悲しみを引きずるような調べで歌っています。今回の地震が北陸で発生したこと知った時、新潟に住む橘さんのことを案じられた冬雷の会員の方も多かったでしょう。

■島木赤彦の一首鑑賞　3

妻子らを遠くおき来ていとまある心さびしく花ふみあそぶ　　島木赤彦『馬鈴薯の花』

文学で身を立てようと養鶏を始めたが失敗した赤彦は再び教師に戻り、単身赴任で塩尻市に近い広丘小学校の校長となる。広丘村一帯は桔梗が原と呼ばれ、やせた土地に冬は荒寥とした松林が続き春には美しいげんげ草が一面に咲いたという。歌の中の「花」はげんげ草だったのだろう。「さびしく」といいながらどこかに楽しんでいるようなゆとりも感じられる。三十四歳での単身赴任は家族と離れた暮らしの中で仕事にも文学もに専念できたようだ。ここでの二年間は校長としての任務に力を注ぎ、教材や教授法の研究に励み教師に信頼されて校長としての実績を高め、歌の方では「比牟呂」と「アララギ」の合併もあり非常に多忙な時期でもあったようだ。赤彦を校長として歌の師として敬愛した中原静子も広丘小学校の教師だった。四十五歳頃から作ったという童謡は素朴で温かな子供らしさがあって読後にクスッと笑ったり、ふっと考えたりして心が和む。

（小林芳枝）

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長　髙橋　克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。

投稿などの機会が得られます。●（年会費二五〇〇円）

●本部事務局　江戸川大学　髙橋　克　研究室内

〒270-0198　千葉県流山市駒木四七四

☎　〇四（七一五二）〇六六一（代表）

作品一

桜　井　美保子　神奈川

京急線のホームに居れば「寒いですね」掃除する人こゑを掛けくる
週三回駅の掃除に来てゐると話す女性は七十前後か
駅のホームのベンチで食事する人を咎めず笑顔で応対するらし
ごみ袋片手に女性は知り合ひのやうな自然さ電車来るまで
ぽんぽんとキャッチボールの会話せり駅のホームに見知らぬ人と
水彩のスケッチ展を巡るとき「絵を描くのですか」問ふ人のあり
会場に出会ひたる人よかつたらどうぞと絵画展の葉書くれたり
やはらかに光と影を表はせるスケッチ展に心は遊ぶ

田　端　五百子　岩手

結婚の祝ひと輪島の五段重ね漆もはげずに六十余年
道の駅能登特産の品求む私に出来る小さな支援
募金箱に少しの心寄せし午後輪島の箸でうどんすくひぬ
加賀能登の花嫁のれん観せられしよ今は瓦礫に埋もれてゐると
徹夜すと言ひゐる孫に三分まつカップラーメンに湯を注ぎやる
小春日に雪解の泥を洗ひゐる小さな虹が車を囲む

婿殿の代理の寄り合ひに出席す名代ばかりの会議始まる
待つ人もあらざれば独りストーブに湯を滾らせて卵かけご飯

野　村　灑　子　千葉

うまき字の書ける気のして賜れる遺品となりし師の筆おろす
手入れよくをさまりをりし師の筆を賜りて硯に穂先をぬらす
几帳面な師の性格の思はれて遺品となりし法帖開く
枯葉集め庭隅に置くゴミ袋いつしか中の葉小さく朽ちゆく
卓上の虫メガネの位置移動さす東より入る朝光強きに
年代ものの火鉢に水を湛へゐてそが中に水蓮さはやかに咲く
歯ブラシを携帯しゐて食後には磨くを常とし長らへゆかむ

正　田　フミヱ☆　栃木

庭先に野菜や花の苗入れに作りてみたりビニールトンネル
作りたるビニールトンネルは水やりや温度の管理必須となりぬ
春菊苗をビニールトンネルに入れたれど水やり足らず枯れさせてしまう
植木鉢にビオラ種まき苗作り鉢上げできず花が咲き出す
鉢上げの出来ずビオラの花咲けばひしめきあいて鉢に輝く
来年は鉢にビオラの直まきを試してみたい健やかにして

飯　塚　澄　子　東京

堀際に道路に向かひ三つ咲く椿の花の惜しい姿よ
六時半障子開けるに小鳥ゐて盛んに突つく蕾紫木蓮

近況を伝へんと送りしわが写真表情褒むる声高の友
小三の曽孫のバレー姿見て友驚嘆す琴演奏も
九十六独身通しし教員の友の生涯あつぱれにして
リハビリの仲間の男毛糸玉の細工なしたるを我に呉れたり
柔らかい毛糸の玉よ二種類の白糸混ぜたる良き贈物
帰り来て毛糸の玉をまさぐりつ返礼思ふ一週間後の

斉藤　トミ子☆　栃木

何処までも徘徊できるとリハビリ師足の筋肉称えくれたり
白根山雪を被りて輝けりリハビリバイク力み漕ぎたり
看護師の孫の悠太を思いおり男の看護師検温に来て
茶碗蒸し蟹爪コロッケ卯の花煮我れ祝う如最後の晩餐
大き口開けた御化けは幻か手術最中に見え隠れする（白内障手術）
湿疹の治療に訪いたる皮膚科にて踵に癌と言われた妹
メラノーマステージ1（ワン）との診断に胸撫で下ろす思わず涙

高橋　燿　子☆　埼玉

椋鳥の水浴びのさまを見ていたり午後の川面の煌めく陽ざし
キラキラと耀よう川に笊を持ちて魚とりたる日の蘇る
風に乗るシャボン玉を追う子等が飛んだり跳ねたり両手が躍る
一面に咲くホトケノザ見る友が杖をたよりに身をかがめたり
空向きて一律に並ぶ木蓮の蕾に近づきて騒がしヒヨドリの声

吊るし雛眺めて恨めし腰痛を患う今年は友を招かず
こぼれ種のパンジーが咲く畑に作業をためらい眺めていたり
春の土手に吾亦紅を掘り上げた友との思いで赤い芽を見る

浜田　はるみ☆　埼玉

早咲きの河津桜は二月初旬桜と菜の花四月と見紛う
せいしょう納言と言っていたのに聴きて気が付く清　少納言
雪でなく霰（あられ）コロコロ稀なこと硬さ見るため思わず踏んでる
幼児期に食べし物で味覚でき好物干し芋後を引きたり
退職後パソコンすっかり遠ざかり好きな事のみ専念したる
今年はちっちゃな雛を飾ろうか年に一度は出してあげよう
能登地震起きし今年は冬遊びの楽しき思い出少しも浮かばぬ
戦時下にも地震の地にも春がくる桜の季節がまたやって来る

野崎　礼　子☆　埼玉

風の音きらめき始め白梅の花近づけばほんのり香る
春の雪一面に白く照り返す桃の蕾淡いピンクに
せせらぎの氷溶け出す春の音信濃の春に逢いに行きたい
冷蔵庫の隅に眠る菜の花は黄の花咲きひっそりと春
旅の本一足早い春だより飛んで行きたい海の向こうへ
午後からは捏ねて叩いてピザ作り菜の花のせて食卓は春
持病の一つ二つありますと同い年の医師にっこり笑う

人並って誰が決めたの障害を持つ人の声心に沁みる

飯　嶋　久　子☆　茨城

何たること転んで頭にたんこぶ三つ救急車にて搬送さるる
厳寒の土曜日の夜八時過ぎ魔の時間帯と聞きしことあり
三十分電話かけ続け隣町のクリニックに受け入れらるる
ＣＴスキャンに今のところ異常なしされど注意怠らぬようにと
二日後に腰の痛みあり整形外科へなんと肋骨骨折ありと
自然治癒待つよりすべなしと告げられて固きベルトに身を守らるる
海の街に大漁桜と名付けられ無人駅に花咲き始むる
梅の便り桜の便りもテレビにて今年はひたすら養生の日々

糸　賀　浩　子☆　茨城

早春の朝の食器を洗うとき蛇口に映る小さきわが顔
薬強く浮腫む両脚かばいつつ運転教習合格の我
わが母の齢を超えしことのみがせめての孝と心なぐさむ
台に乗り蛍光灯を取り替えぬ八十六歳なんのこれしき
レジを待つ老いの籠にささやかな食材のほかビールひと缶
子の家に移り住みゆくは易けれど置いてきぼりの先祖の墓所
今朝の膳一汁二菜蟹の缶心ふくらむ春の菜ばかり
ポケットにしまい忘れしスカーフが手品の様にふわと現る

岩　渕　綾　子　岩手

ＮＨＫスペシャルゲストの内出幸美（ゆきみ）氏能登半島地震に素早く応援
黒のパンツスーツを身に纏ひ物怖ぢせずに意見述べけり
能登半島地震と３・11の違ひあり道路脆弱にて陥没あまた
女性として誰にも劣らぬ資質見ゆわが故郷の誇りなるやも
友が逝きショック受けたる四六時中背の君のもと安らけくあれ
ねこやなぎ梅の花添へヘルパーさん沈みし心を癒してくれぬ
脳梗塞大腿骨骨折のわれ五年余りをデイケアに生く

樗　木　紀　子☆　東京

隣庭大豊作の夏みかん女性は取れず神社に頼む
男孫言いしを思う「土蜘蛛の生きているのを殺さないでね」
我が家では通称土蜘蛛チリ紙でやっと捕えて窓から逃す
シルバーカーでカルタ会の部屋代を往復二時間かけて届けぬ
通院に路変え行けば民家の庭に淡いピンクの梅の花あり

田　中　祐　子☆　埼玉

吹き荒れる北風の日の三日目を辛抱しつつ明日を待てり
冷蔵庫に残る野菜をまず寄せてオリーブオイルに炒め煮の餡掛け
有り合わせのわが昼食に相伴の子の旨いねの声を楽しむ
少女期の読書の記憶の断片に「次郎物語」の邦画を観てる
勉強が疎かと母の小言の次ぐ読書に籠るは昔も今も
半年の間を置き来たる少年は涼やかな目に合格を告ぐ

倉　浪　ゆ　み　埼玉

川越の町にも大雪ふりし時根元から倒れし古木の木犀
リハビリの若き先生豊かな知識いとたのしけれ治療の刻は
みどり有るは有り難きかなと思ひつつ家の巡りを掃くのは日課
やはらなる小さきみどり一面に諸葛菜のその葉のみどり
ぢざう様うめの花びら身につけて笑顔で座します木もれ日の下
風と遊ぶうめの花びらふうはりと小さな手にうける散歩の園児ら
寺庭の紅梅白梅ほころびてスマホかざして和服の人ら

林　　美智子☆　東京

朝々の窓より見下ろす用水の水底澄みて清らに光る
三月十日下方（しもがた）の人集まり来て用水の藻をさらいて行きぬ
用水に美事にうねる緑の藻かき上げられて黒黒と積まれ
数日はまだ清掃が続くのか流れ止められ泥の用水
二十日たち桜の花が咲き出せば花びら載せて春の用水

石　本　啓　子☆　東京

手作りのお手玉取り取り懐かしく体操前に夢中になりぬ
友達とお弾きお手玉縁側で遊びし昭和のわが日々思う

矢　野　　操☆　香川

庭すみの黄色すいせん十個咲く好みの花にはさみをいれず
お茶づけにくき茶ぴったり〝かりがね〟の銘柄ずっと変えられぬまま

かみやすきジョナゴールドを自分用投稿はがき書けたねぎらい
一日の多い動作は使う物ことごとく感謝の会釈する
ベッド上けいたいラジオおき時計懐中灯の三必需品

松　中　賀　代☆　高知

春色の花がさくにはまだはやく仏の座さき畑は春めく
日当たりの良い畑には一面に紅紫の仏の座さく
外灯のあかりに収集場所までを両手に運ぶ明日は缶の日
北窓のカーテン開ければ菜の花は風にもまれる雨に打たれる
たま偶に青空となり風もなく婿殿が来てキウイの剪定
伸びた枝太枝小枝古い枝切り詰めてまつ新しい芽を
春先の風に杉の木揺さぶられ凄まじく飛ぶ薄黄の花粉
作主が病めば果木も病むと言う昔の人の言い伝えあり

本　郷　歌　子☆　栃木

臘梅に万両紅き寒菊が庭の恵みと友より届く
刺しかけの雛の刺繍は三月となりても未だ木枠の中に
一心に又一針と刺しゆけば桃の花咲く白きナプキン
積みたてし年金受け取ることのなく五十九歳の母は逝きたり
一面の霜に当たりゆく三月の日差しは春の柔らかさを持つ
荒草にあれども春に先駆けてすずな、犬ふぐり、仏の座咲く
「どっこいしょ」「よっこらしょ」が古希過ぎた我の伴侶となりて久しき

私など百五十歳まで生きちゃうわ美人薄明なんて言うなら

村上　美江　岩手

口開かぬ息子に歯科医の名治療話題にのぼる祭りや七夕
転倒せし場所を片付け不意に来る「痛かつたらう」「婆ちやんごめんね」
何故ここにデイで写しし写真有る何かをしようとしてゐし義母は
いつもとは違ふ義母の行動をもつともつと気に掛けてゐたら
骨折したる義母へ手を振るタブレットビデオ面会十日目の顔
誰よりも先に孫の名を呼びてその子に話す「治つた」と義母は
手を掛けし孫の名を呼ぶ義母の声「痛くないか」に「痛くないよ」と

伊澤　直子☆　東京

香り立つ梅の林に河津桜日の差し色は輝き放つ
黒松の剪定の切り口艶やかににじみ出る脂光りておりぬ
静もれる日本庭園の橋の上ドコモの塔は頭上に迫る
公園に向かう小路に梅の香のただよい来りてうめ園近し（神代植物公園）
うめ園の入口にあるサンシュユの花広がりて足を止めたり
梅古木幹くねらせてなお生きる龍思わせる形をなして
雲紋竹百年に一度咲くという花終りたる穂の色あせて

乾　義江☆　茨城

鮮やかに黄色い果実の空に映ゆ自転車に見つつ医院に行く道
流氷にシャチの閉ざされ子を守り時に血まで出すと地元の男性

流氷と戦うシャチは人間の本能に似て涙ぐましも
早朝に隣家の梅の綻びて寂として咲く二輪の白梅
新種かなもこもことした濃緑の菠薐草の甘き美味しさ
胃のオペを若きに済ませし人が今日血液に出で来とさらりと言えり
今朝さらに濃き紅梅のひと木あり日増しに綻び満開近し

保護猫ハービー　永光　徳子☆　東京

海外で暮らす娘の保護猫の手術案じてライン飛び交う
極寒のトナカイ住む地で保護されて巡りめぐりて家族となりぬ
辛き過去微塵も見せず穏やかな美しき目の猫のハービー
傷も癒え窓辺で寛ぐハービーの背には自慢のハートの模様
一匹の謎多き猫ハービーは家族ラインを今日も賑わす

稲津　孝子　福岡

わが庭の茎ながき日本水仙を友もちてゆきたり如月の茶会に
転びさうになりて畑に立ててゐる野菜の副木に掴まりてをり
粉こねて母の作りしドーナツの生地は耳朶の固さと言ひゐき
治療終へて医院の段差に主治医なる同期の彼が支へてくれつ
電車降り改札口へ歩きゆくうしろで夫の聲せる如し
いつも置く所にあらず慌てつつ探していつもの所にありぬ
歩かなくなりたる母が一日を姿勢正しく坐りゐし椅子
ご執務といふ新聞の一行に坐り給へるお姿おもふ

戸部田　とくえ　福岡

赤飯を炊いて娘の誕生日芽吹ける庭のふきのたう摘む
マニキュアのサービスにて華やかに美容室の鏡に暫し恥ぢらふ
人の世の真心たふとぶいかにして育てていかむ先づは信じて
千筋菜その名にまさる大株を隣りと分けあふ工夫の献立
大株に育つその名は千筋の母は年々そだててをりぬ
噛み合はせ医師に調製されてのち悩み解決もどる壮快さ
屈み見るいぬのふぐりの花と空かぎりも非ず委ねて憩ふ
マティス展運よく子らと鑑賞して東京より戻る天気に恵まれ

大　塚　照　美　兵庫

高野山の土産をもらふ師走なかば正月の壺に活く高野槙
退院し今朝は亡夫と差し向かひいちにち早き七草の粥
食卓に花なきけふの詫びしかり色彩が欲しひとりの部屋に
大寒の交差点なる若き僧まなこを閉ぢて胆力の聲
夜の更くる濠の冷き水に浮く鴨は動かずひとかたまりに
木星の輝きみゆる窓ガラスに私が映るひとりのわたし
重き荷にひと息つける玄関さき紅椿おつ庭石のうへ
いつよりか友の名を見ず「冬雷」を楽しみて繰る今月こそと

吉　村　昌　子　千葉

東京の娘より元気で買物に行けてゐるかと時々電話

二十箱越ゆるプランターのパンジーが花盛りといふに蝶蜂まだ来ず
雛あられ買ひ来て雛に一袋われ一袋まづは味見を
このところすぐに疲るるわがからだ父亡くなりし年になりたり
久し振り予定の無き日あしたより霙が雪になるを見てをり
お楽しみ会にて舞台に「雪国の春」を歌へり天井を見て
白雲の低くたれこむわれの空すずめ烏がひと日見えない

井　上　槇　子　新潟

一夜にて降り積む雪を除きゐる隣近所の雑談騒がし
夫の香と同じ男と擦れ違ひ忘れをりたる整髪料買ふ
要(かなめ)の木小枝を降ろす生垣は閑静にして雪に埋もるる
急激に暗くなりたる西空に雷鳴とどろき雪となるらし
雪荒れのやみたる午後の澄む空は弥生に近き青さしそめつ
庭の松円錐形を保ちゐてひと冬映ゆる雪吊りの縄
いま暫し春を待つべし耀へる川の岸辺の芽吹きの柳
日もすがらワイパー動かし車止む凍みの防止の野外駐車は

吉　田　佐好子☆　茨城

梅の花二月の小春日和には半分ほどが蕾ふくらみ
関東に雪マーク出たその朝は高速閉鎖で早起き必須
五分咲きの梅にぼた雪降りかかる小枝振るわせ花隠される
冴えもどる三月初めの寝る前は毛布一枚余分にかける

入試後に日長自宅で過ごす子に風呂掃除託す念入りに洗う
動画見て掃除の仕方やノウハウを見よう見まねで実践してみる
春一番、二番三番吹いた朝葉っぱや枝で庭うずもれる
花粉症鼻水止まらず鼻下にティッシュを当ててマスクで隠す

鈴木　やよい　東京

ちから込めツノ立つほどに泡立てて顔を洗へば少し気の晴る
健康に速歩が良しと勧められ早速試せば今日は筋肉痛
バスの窓は冷たき雨に曇りゐて輪郭ぼやける梅の花見ゆ
春の日に買ひ求めたるマグカップ取つ手ゆつたり軽きがうれし
MIT の天才たちをテレビに見つつ吾が悩むはまとまらぬ歌
感染に梅の木すべて切られたる梅郷訪る十年を経て
平日の閑散とした道をゆく梅祭りの幟が並びゐるなか
かつて見し景色は無けれどそれぞれの若木が咲かす花は美し

中島　千加子　東京

この日だと決めて訪ぬる境内に枝垂れ梅香る八分咲きなり
連なりて咲き継ぐ梅の香の強さ吾の時間をしばし止め置く
ももいろの花の列へと手袋をとりて指先伸ばして触れる
愛らしき色とかたちの枝垂れ梅こんなに近き場所にあるとは
枝垂れ梅の向かうに立ちてゐる人と目が合ひ小き会釈を交す
また会へる運命ならばきつとまた枝垂れ梅咲く先を見つめる

この仕事せねば後悔するだらう困難女性支援相談員
誕生花マーガレットを生けた後聖書の愛の句を書きうつす

山本　三　男☆　群馬

退職後十数年が過ぎたれど下請けいじめはまだ有ると聞く
県外の図書館までに車駆るわれを動かす訳知れぬもの
機関紙の編集をする君のため問題を解きハガキを送る
妻と来し梅の花咲く公園にわが退屈を言葉に出さず
返信はあす朝にせん回答は保留したまま今宵眠らん
夕食の後のコーヒー飲むときにいつしか怒りは治まりており
まだ寒い三月の庭に夏に咲くホタルブクロの葉を確かめる
スーパーに妻の買い物待つ間防災グッズなどながめていたり

中村　哲也　宮城

ぶつからず脚を互ひに交差せるタンゴダンスの一組の技
ダンスにて衣装の脇に垣間見る女性の脚にふくよかさ無く
男性が女性ダンサー持ち上げて我の隣席「あつ」と声出す
レジ脇に小さき文字で綴られる三月二十日に値上げの言葉
弁当にクリーニングに生活のをちこち漂ふ値上げの表示
この頃に荷物の多きはメーカーの値上げを前に確保の需要
十五日未明に突如ガタガタと地震の揺れに眠気も失せる
番組の終了間際に檜山沙耶退職報告突然に言ふ

（☆印は新仮名遣い希望者です）

三月号作品一評

小林　芳枝

白イルカの群れはゆつたり泳ぎゐて腹を天井にむけゐるもあり　野村灑子

水族館の大きな水槽に馴染んで泳ぐイルカに警戒心はないようだ。下句にその安心した様子が具体的に詠まれている。

子らからの大きな花束抱えつつ婚五十年の写真におさまる　正田フミヱ☆

最近は野菜作りに励んでいるようで玉葱を苗から育てる歌もありお元気そうだ。婚五十年を迎えて子供や孫達に祝ってもらえるお二人を私も遠くから祝いたい。

一秒ずつすり減る命感じおり四人部屋に目覚めておれば　糸賀浩子☆

入院中の不安と緊張感は夜になると増してくる。カーテンで仕切られた部屋は四人で居ても孤独である。どうしても悪い方に気持が向いてしまう心のなかがありのままに詠まれている。

似てないと思いていたる三姉妹何やら似てきた七十過ぎて　本郷歌子☆

若い頃には性格や好み、体格、表情などもそれぞれ違っていると感じていたが老いてだんだん似てきたという。親から受け継いでいるものが現れて来るのだろうがますます近い存在になってくる。

正月に庭の実生を瓶に生く赤き万両白き万両　稲津孝子

生ける花を庭から持ってくるということが私には素晴しいことに思える。赤と白の万両は新年の祝いに相応しい。

家前の公園の奥の一つ木に雀等夕べつぎつぎ帰る　吉村昌子

雀はどうして夜を過ごすのだろうかと思っていたが、この歌にあるように仲間と一緒に眠るらしい。帰ってくる雀を離れて見ている視線が優しく感じられる。

入院を再度する夫着膨れて冬の御堂に経を読みつぐ　井上槇子

退院はしたけれど又入院して治療を続けるというご主人は住職である。御本尊に向かって経を読む姿を見守る作者の不安は如何許りであろうか。「着膨れて」に思いが籠められている。

大晦日中国の人餃子食べ日本は蕎麦で韓国ちまき　吉田佐好子☆

年越しの食べ物も様々なようで面白い。日本の年越し蕎麦は今年の苦労や不運を断ち切って新年の幸せを願うという意味があるらしい。効果のほどは不明だが幸せを願うことは続けたいものだ。

振袖の成人もまじる駅前に托鉢僧のおだやかに立つ　鈴木やよい

成人の日の駅前風景。晴れやかな成人たちの行き交う中で静かに立つ托鉢僧が印象的。「おだやかに」が効いている。

同意せず返事をしないわれを見て妻はそれ以上話そうとせず　山本三男☆

どんなに仲が良くても同意できない事はある。表情で感じる賢い妻とその気持を充分に理解している作者、積み重ねてきた年月の呼吸が見える。

雪掻きを覚悟し来たる故郷に青空広がる元日の昼　中村哲也

真っ先に雪掻きをしようと帰って来た古里は晴天だった。空を仰ぎながら何時もと違う風景に拍子抜けする作者がみえる。

三月号作品一評

藤田　夏見

仲の良き夫婦にあらずも共に生き婚五十年がだんだんと来る　正田フミヱ☆

金婚式とは二人がひとつ家での五十年。その明け暮れを恙無く過ごされた事に、お子様方の感謝と祝福はいかばかりかと、おめでとうございます。

政治家は苦労知らずの二世ばかり日本の未来希望が持てず　野崎礼子☆

日本の未来を憂う作者。情報の揉み消しが得意で清濁合わせ飲むなどと称えられた一世。巨額な裏金を自由にできないと知ったら二世は消えるのでしょうか。

火を止めてともあれ離るる小半日に黒豆緩みて仕上げにかかる　田中祐子☆

丁寧に調理された黒豆は器の上の芸術品。長年繰り返しの仕事とされてきた作者のささやかな矜持でしょうか。

早々にあちこちの田は春起こし仕事始めの耕運機の音　松中賀代☆

仕事始めの耕運機の音が忙しなく、あたりに響いて聞こえる。作者はこの新年の寒起こしの作業を春起こしと寿ぐように詠まれた明るい歌です。

穏やかに今在ることの有難く息子と折り合い付けて暮らすも　石本啓子☆

新年を感謝を込めて迎えられたのでしょう。ご子息ともそこそこの距離感を計りながらの、穏やかな暮らしぶりを詠まれた。折り合いをつけるが謙虚で現実的。

似てないと思いていたる三姉妹何やら似てきた七十過ぎて　本郷歌子☆

同じ親御さんから生を受けても似ていない三姉妹と思いつつ来られた。同じ骨格を持ち年齢を重ねた証でしょうか。

細ぼそと生りつづける茄子ピーマン冷ゆるその実をけさ収穫せり　戸部田とくえ

茄子とピーマンは夏野菜の代表ですが、霜が来るまで収穫出来る優れもの。細ぼそとなりつづけるという表現に収穫して食卓に乗せる喜びを感じる作者でしょう。

自治会の餅つき大会あんきな粉われの持ち場の醤油の長蛇　吉村昌子

賑やかに餅つきをした後のお楽しみの時間。作者の持ち場の醤油は長蛇となったと言う。対応に追われつつ華やいだ時間の快い疲れに満足されたのでは。

起き上がり去年のマフラー見つけ出す布団の襟元急に冷えくれば　鈴木やよい

思いがけない首のあたりの冷えに、うとうとした眠りから起き出して、去年使っていたマフラーを探し出した作者。ふとした日常の中で季節感のある歌

新しきパジャマは軽くて暖かしこの幸せに一夜眠らん　山本三男☆

新しいパジャマの着心地に、静かな幸せな眠りが来るだろうと。作者の満足感が読者に伝わります。

雪掻きを覚悟し来たる故郷に青空広がる元日の昼　中村哲也

元日も雪掻きをするという雪国をふるさとに持つ作者。〈ふるさとに帰る、でなく来るとの表現は作者の年齢的にはそうなのか。〉当たり前のように、雪掻きを覚悟の作者の頭上は青空だった。清々しく気持ち良く鑑賞出来る歌。

五月集

山鳥を見かけたといふ友のゐてその木葉山（このはやま）へ誘はれゆく　益坂順子　福岡

一の坂二の坂三の坂ありて祠に拝むピークの度に

幾つかのピークを越ゆる縦走路展望ありや子等の声する

限定の三日間のみシャトルバス運行さるる観梅の頃

シャトルバス横目に見つつ歩くこと慣れたる友と足早に行く

なだらかな斜面を彩る紅白の盛り過ぎたる梅二万本

観梅のついでに来たる飛形山筑後平野の青を眩しむ

雨のあと嘗ての石臼みづ湛へ梅の花びら乗せて明るむ　内垣米子　千葉

晴れわたる光のなかに残りゐる雪を吹く風ほほに鋭し

空あをく風の冷たき朝戸出にマスクマフラー手袋必須

北風に冷えたる指先じんわりと血のめぐりきつ電車の中に

少しだけ薄着のあした新しくなりたるカーブミラーの透明

傘さすか差さぬか迷ふほどのあめ水の溜まりに波紋たしかむ

円錐に盛りたる仏の飯（いひ）に似て薹の立ちたる葉牡丹ならぶ

ゆくりなく胸にしみ入るヴァイオリンの音色ながるる五木の子守唄

東日本大震災母の他界とわが手術かさなりあひてはや十三年　藤田英輔☆　高知

昭和レトロのバイク展に出品す亡父の持ち居しホンダモンキー

ベンリーやメグロの並ぶ体育館三十台は昭和を纏う

最後まで使い切れたるボールペン背を伸ばすがにペン立てに在り

診察の終わりたる後に面会の叶わぬ母の現状を聴く

真直ぐに求めるモノを指さして伝えたき児は言葉をさがす

バイバイと手を振ることを覚えたる二月の陽射し小さな帽子

零歳は二十歳に抱かれ三月の陽射しを受ける従姉妹のふたり　梶尾栄子　兵庫

田の畔にその身揺らせて鳴く鴉鋭き眼にわれを見ながら

紅梅は光の中にふくらむも迷ひゐるらむ寒暖の差に

突つつけば即座に弾けてしまひさう蜂に刺されし手の甲の腫れ

館山の花摘み体験とふツアーに十本百円のポピー摘み来ぬ

好文亭出でて迷ひぬ梅林の果てなきごとく続く小道に

山裾のわが畑早も日の陰り二キロ先なるビルの輝く

寒空に電動自転車に姉の来て話は尽きず茶房を移る　齋鹿ミヤコ　神奈川

お浸しになるはずの菜のひと束が黄に咲き盛るコーヒーカップ

ビニールの袋のなかのジャガイモのすべて揃ひて芽を出してをり
パンジーの黄と紫の花の数ふえて来たりぬ弥生の庭に
いつ何が起きてもをかしくない齢肺の炎症背骨の骨折
医師の指す肺の画像を追ひゆけば影の消えたり傷を残して
食卓の上に増えゆく菓子袋重なる書類歯磨きセット
床に置く段ボール箱かばんなど支障なければ良しとするべし
文句言ふひとも居らずに片付かぬものの増えゆく上がり口あたり
庇ひつつそろそろ歩けど運転すスーパーの買ひもの美容院へと

松　居　光　子　三重

霊前に酒好きだつた伯父おもひ息子は瓶入りの酒を供へぬ
紙コップに酒を入れ替へ柩の中に入れてくれたり斎場の人
脱脂綿に酒を含ませ唇に姉はやさしく潤しをりぬ
とりどりの花いつぱいに埋もれて八十三歳の義兄は旅立つ
ペットボトルのキャップ開けるに力及ばず車掌さんにお願ひしたり
若いつて素晴しいこと訳もなく車掌さんは蓋開けくれぬ
二度三度ありがたうを繰り返し老いを寂しむ車内の我は

川　俣　美治子☆　栃木

山道の木々の間の木漏れ日の柔らかな光にしばし止まる
玄関にてんとう虫を見つけたり動かずじっと我慢競べする
西風が水仙の葉を横なぐり春めいた空気吹き飛ばしゆく

春という言葉を聞いて文字を見るその度に気分春めきてくる
お出かけは眼鏡にマスク帽子まで今年も来たり花粉の時期が
スズメ鳴く声に誘われ庭見れば朝日の中で戯れる二羽

加　藤　富　子☆　栃木

女三人姦しいが元気の秘訣にてキルト縫う手のゆるゆる動く
おしゃべりはフレイル予防になるという女性の長寿の原動力か
茶請けを用意して待つ友のいて月に一度のキルトの稽古
二十度を越ゆる温度に一斉に花茎を伸ばすクリスマスローズ
ひな祭りに固き蕾のチュウリップ七日目の朝黄の色見ゆる
春の日は大きな力の栄養素慈雨にも恵まれ新芽健やか
単純な遊び飽きずにくり返す待合室の幼の笑顔

「お江戸深川さくらまつり」

永　野　雅　子☆　東京

恒例のさくらまつりの寄付金を集める作業見直しをする
亡き父より引き継ぎ集金十年も続けたること感慨深く
牡丹町商店街の集金は常と変わらぬ現金回収
川縁の護岸工事は予定より遅れて桜並木の景観損なう

西　村　邦　子　兵庫

欄干から覗き込めば小波に押されて寄り来る鯉は口開く
苦手とは言へねど友の愛猫が吾の足元にゆつくり寄り来る
卓の餌猫も一緒にティータイム豊かな毛並の尻尾寄りくる

もの言はぬ友の愛猫ソファーから吾を見つめるブルーの瞳
カレッジの異なる生活空間にやうやく慣れくる修了近く
芦屋川シニアカレッジ緩やかな時間の中で見つけたるもの
それほどに知ることもなく経たれども寄稿文に知るその人のこと
記念誌の「人生歳時記」寄稿文同世代なる境地にうなづく
野口秀子　山形

『東京都同情塔』五ページ残し出掛けよう車椅子に待つ夫に逢はむと
夫に似合ふ色の紳士服目に付くももう着られない売り場を過ぐる
掃除機のLEDライトは床面の小さき埃をも照らし出す
おしぼりはボタンを押せば温かくふんはりと手に丸まり落ち来
越夜をば十日耐へぬき復旧しSLIMは月面の写真送り来
口論の胸の高鳴り鎮めんと大人の童謡スマホに流す
遠空に浮かぶ山頂真つ白に蔵王雁戸と神室連なる
賑やかな子供の声の響く朝ピンクの帽子列なしてゆく
しやべりつつ公園にゆきたる園児たち帰りは無言に歩みものろく
吉岡松世　愛知

野の原に星空からの贈り物白き小花の一面に咲く
どんなにか励まされしか優しさを感じて読みし『かぜのてのひら』
病院の待合室で数独をする人の居るのどかな時間
菜の花と河津桜のうつし絵を送信したり施設の姉へ

三月集／残響集評
ブレイクあずさ

鋭くも未明の空気切り裂くは除雪車ならむ眠りを醒ます　本間志津子

「鋭く」「切り裂く」「醒ます」と重ねられたシャープな音が、これもまたきっぱりとした響きの「除雪車」を中心に、冬の研ぎ澄まされた空気を伝えて来る。降りしきる雪は重たく、未明の町は暗い。除雪車の孤独な作業に作者の意識が重なってゆく。

居間に置くハイビスカスの咲く真冬その紅を朝毎にほめる　東ミチ

南国の花を雪国のしかも冬に咲かせるのは容易なことではないはず。「朝毎に」声をかけ大切にされているからこその成果だと思う。そしてその艶のある鮮やかな色は大きな励ましを与えている。人と花が寄り添って暮らしている。

家中みな寝しづまるとき聞こゑくる家の呼吸かささやきに似て　佐藤靖子

木材が水分を吸って吐くときの家鳴りであろうか。昼には気づかないかすかな音が、夜の静けさと深さをいっそう引き立てている。

大切に生きると言ふを今日少し知ると思ひぬ落葉踏みしめ　須藤紀子

大切に生きる。それは死を意識したからこそ出て来る言葉だ。作者に働きかける何かが「今日」あったのだ。「少し」に実感がある。冬枯れの道をひとり行く。思索が深まっていく。

寝た切りになりたくなければ一箇月ねよと言はれ寝るラジオを友に　三好規子

痛みに耐え不自由に耐えての一か月はどれほどに長く感じられることだろうか。だがこの安静の時間が後々の回復の喜びにつながるのだ。寝る（ねる）と言う言葉が形を変えて三度繰り返され、そのことを強調している。つぶやくような結句に声援を送りたい。

手の平にのせたヒントはなくなりて言葉探しを再び始む　藤田英輔☆

詠いたいことは確かにあるのに、言葉をどうにも捕まえられない。そして捕まえたと思ってもするりと逃げられたりする。そのもどかしさが繊細な感覚で表現されている。

手作りの干柿やればていねいなあいさつくれる隣家の子供　豊田伸一☆

「手作り」、「ていねい」と重なる「て」の音が、歌にやわらかなアクセントを添えている。作者の歌によく登場する将棋好きの子であろうか。温かな交流がほほえましい。

除湿器の水を静かに捨つる夜ふと思ひ出す母の介護を　佐藤幸子

家族を起こさぬように「静かに」行動している夜更け。睡眠を削っての介護の日々も、今では過去のこととなってしまった。寂しさと懐かしさがある。

朝市の地べたにわづかな唐辛子並べゐし媼いかに在すや　井出裕子

「地べた」「わづかな」という言葉が老女のつつましさをよく表して、時事詠に生身の息遣いを与えている。柔らかな結句は祈りである。

残響集

佐々木　政　子　岩手

怠りて年越したれば衣類などの整理に励む正月さなか
郵便受けかたこと音してバイク去る良き便りあらむ急ぎ玄関に
親しくも語るは黄泉の夫なりきわれこの世との境思はず
ものなべて放りたくなる時ありぬ思ひなほせば又意欲わく
頼まれて子らに家をば建ててやり岩手に終る運命となりぬ
厳美渓の岩に逆巻く流れ見つつ娘との同居に迷ひてゐたり
われは趣味を二つもちつつ娘の世話にならぬと決めて心落着く
沈む陽の余光明るき冬の空栗駒山は銀に輝く

片　桐　美穂子☆　神奈川

スタバにて「さくらクリーム」独り飲むこれが春かと自問しながら
四日市コンビナートが煙吐く背後は雪の鈴鹿山脈
彼方から曳船すばやく近寄りて舳先のタイヤで大型船押す
温室のドアが開けばベゴニアの花が上にも前にも下にも
「ママがいい」泣き叫ぶ孫我の手を振り払っては服を着させず
一億の値が付くダイヤのネックレス雑誌で見ても現実味なし

マダム向け雑誌は大人の絵本なりドレスごちそう贅沢な夢
来賓の席に着く吾の首もとに亡き母からの真珠つながる

後　藤　恭　介☆　茨城

テープにて勝海舟の生きざまを耳学問にて学ぶ一月
古稀を越え「ジャネの法則」身に沁みる一年一年早く過ぎゆく
厳寒日の暖房効果高めんと高天井よりカーテン垂らす
年始めの昭和の女性ら美声なりカラオケ仲間に元気をもらう
玄関に主まち居る老犬が反応少なに我を見つめる
立春にコロナにかかり熱高く咳続く身を自宅に籠る
友の経験参考にして妻とわれ食事や部屋を分ける生活
毎日が見えない菌との闘いなり体力つけて予防につとめん

金　子　八重子☆　千葉

ひとまわり背丈の伸びてバタフライのフォームに自信のしぶき上げたり
餅巾着先に手に入れあと十種メモした順におでん種買う
バツイチとあっさり言われて同僚へ返す言葉に一瞬とまどう
薬局のアプリのクーポン活用し更に得ありスマホ決済
気品ある香りを放ち沈丁花垣根の角に楚々と咲き居り
沈丁花に顔を近付け思い切り鼻膨らめて香り吸い込む
合格の知らせを受けてこれまでの努力に脱帽きょうは乾杯
脳トレに良かれと麻雀始めたりイーリャンサンスーここからスタート

（☆印は新仮名遣い希望者です）

過去回想の助動詞「し」の誤用・慣用について

『四斗樽』刊行以前の太田行蔵(3)

―『慕何雑詠』を読む―

大山　敏夫

『慕何雑詠』の歌は敗戦を迎える。

⑮政治と統帥陸軍と海軍との一体化に遺憾ありしと今にしていふか

敗戦という結果となり、世の中には様々な意見や事挙げが乱れ飛んだのか。この歌の背景となるのは、昭和十九年に天皇による親任があり、東條陸軍大将が参謀総長に、嶋田海軍大将が軍司令部総長に任ぜられ、政治と戦争、陸軍と海軍の一致がなり総力体制が生まれた事をさす。過去の出来事を言うので「○」であろう。

敗戦だが、戦争が終わればいろいろ良いことも次つぎに起こってくる。

太刀佩きて仕ふる道は終れりと帰り来る子をいかにか待たむ

つつつるぎかへしまつりて帰る子の心の張りをいかに保たむ

戦地から子息も帰還してくる。

たたかひのなき世来らばいましらの今日の涙をあだと言はむや

「や」は反意をあらわすので「あだとは言われないぞ」と未来へ託す気持が出ている。

新しき使命日本にくだれりと心ひそかにいさめりわれは

と、自身も頑張ろうって奮起している。

ひとところ空のあかるき月ならむ今宵清子はとつぎゆきたり

「清子」とあるのは上の娘さん。空を明るく照らす月だとして愛娘の新生活を祝福している。太田行蔵はこの清子さんのことを『登山』という本の中でも大きく語っている。「失望の富士山」と題するところで、当時八歳だった彼女と共に富士登山を成功させている。清子さん自身の体験記まで続けて載せ、ツーショットの微笑ましい写真までも披露しているのである。次の写真は若き日の太田行蔵と清子さん。

この敗戦直後と思われる作品群は十首の小さなまとまりとなっている。続けて「大塚正平に」と題する二首もある。この大塚という人は、『四斗樽』には「大原正平」となっている人物だろう。中学三年生の時に、国語の授業中「将校」の意味を質問して教師の怒りをよび退学に至った友人である。

以後は巻末まで特に区切りはなく大きく連なって掲載されている。

⑯磐梯の裾野の道を茅積みて帰る車にゐて笑みし娘よ

磐梯の裾野茅原茅刈ると茅叢ゆれて人等居りけり

⑰陸前を陸中に越す赤羽根の峠の上の身にしみし秋

世田米の町のはづれの山高み雲はふれつつ通るなりけり

つぎつぎに行く手の空をかぎる山出で来て遠き遠野への道

こうして五首が並ぶのは連作なのだろうか。⑯の「笑みし娘」も清子さんなのか。回想の作品ならば、⑰の「身にしみし」と共に「○」となる。娘が同行しての現在の状況なら「×」ないし「△」となろう。

赤羽根峠は、岩手県気仙郡と遠野市の間にある峠であり、世田米も気仙郡に存在していた町である。磐梯から気仙沼を通り、遠野へ向かったのかもしれない。

⑱ひややかにあたまあれよと恐らくは神おぼしめしわれ禿げにけむ

明治二十八年生まれなので敗戦の年には五十歳という計算になる。この歌の時点で何歳であったのかは分からないが、あの落款がわりの爺のカット絵は、この辺りにはできていたのかもしれない。毛髪が無くなり涼しいというのはユーモアだが、そのような冷めた状態の頭で賢くなれと神が「おぼしめし」たのはすでにずっと昔からの決まり事で、結句の「けむ」も過去の推量なので「○」である。

戦争と敗戦を通過して、自らの禿頭をしみじみ短歌化したのは齋藤茂吉であった。歌集『小園』の、

あかがねの色になりたるはげあたまかくの如くに生きのこりけり

六十代半ば頃の作である。茂吉作品もユーモアたっぷりだが、貫いている筋は極太であった。そして次の「し」の用例も齋藤茂吉絡みとなっている。

⑲どの石か斎藤茂吉が腰かけて命終のこと思ひしといふは

齋藤茂吉が命終を思ったのは歌集『つきかげ』の中の、

忠犬の銅像の前に腰かけてみづから命終のことをおもふや

であるから、渋谷駅の銅像前となろう。次に「し」の用例は芭蕉にちなんでの作品であった。

⑳琵琶弾いて今宵は哭いてあかさむと芭蕉は悲しきこと

言ひし人

この歌の元になった芭蕉の句が何かは分からないが、芭蕉が琵琶を詠んだ句は幾つか思い出す。

行く春や重たき琵琶の抱き心

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

いずれも孤独感あふれる世界である。「哭」は「慟哭」等にも使われる「大声をあげて泣く」意味となり、琵琶を弾きながら涙の声で唄ったのであろう。⑳の歌も、昔の実話の事なので「○」で良い。

茂吉の命終を思う歌をあげたり琵琶を哭きながら弾く芭蕉を思ったり、このあたりの作品は辛そうで暗めのものが多い。

わが心おだしくあれやうからは照り降りよりも気になるといふ

気むづかしきわれに気兼ねてありへつつうからもつひにわびしかるべし

なごやかにうからあらする力なしみづからも心安き日はなし

天候の雨や晴れよりも顔色が気になって家族から見られていたらしい。それを本人も気にかけながら、しかしどうにもならず、心の安息が得られないのは悲しい。

佐藤佐太郎の歌集『帰潮』の

胸に吹く嵐のごとくかくありて怒のために罪を重ぬる

などを思い出すが、苦しい罪悪感である。

㉑うまきものこの塩辛やかかるもの作り伝へし国ぞ日本は

塩辛が好物だったのか同様の塩辛讃歌が三首並んでいる。この歌も、塩辛が生まれたのはかなり昔の事なので「○」。

はれものにさはるちふ如くうかららに思はしめつつ保つひとりを

怠れるもののひがみと子どもいふ世は今かうとわがつぶやけば

いつも通り気難しく振る舞って居ながらも、時には子どもから意見されることもあったようだ。

㉒尾根に出でて見はるかし立つ遠べには越え来し川のにぶく光れり

㉓育ちたる山の国には風の日も埃にほひし思出はなし

㉔ゆけつひの住みかと書きてカナリヤを納めし小箱川に流しつ

三首続けて「し」が使われている。㉒は自らの行為体験なので「○」であろう。㉓「たる」と「し」が使い分けられている。これも過去の思い出なので「○」となる。㉔は死んでしまったカナリヤを小箱に納めて水葬したのであろう。これも自身の行為を指すので「○」だと判断するが、「小箱に納め」の方が良いかと思われる。

㉕寝覚めては枕辺の水をのむこともこの世にてわが楽しみし一つ

枕元に水を置いて目が覚めたら飲むことを習慣としていたのであろう。それを「この世にてわが楽しみし」はちょっと大袈裟な感覚かと思う。いずれにしても、習いとして続けてきたことなので「○」である。

㉖母がよく一雨ごとの涼しさを言ひつつ待ちし秋ならむとす

幾つになっても母は母であり、慕い懐かしむ。母の言葉も待った行為も過去の回想なので「○」となる。

㉗いつのまにかく老いづきし股引をたらして昼の湯に行くわれや

耳鳴りを嘆いたり老境の哀感を歌う中に、出たな、という感じの「老いづきし」である。「老いづく」は「老人になる」という意味だが、ここでは連体形で使うものの下に繋がらず切れてる。「いつからこんな年寄りになってしまったのか」の詠嘆である。以降の句の見窄らしい老人の酷描写が「ヤレヤレ」感を出している。仮に今現在の自分を「老いづきし」と感じてそう歌うのは×にならないものの△だが、この歌のように、時間的経過を念頭にした表現なら「○」かと思う。

晩年の父の心を思ひやる今にしてわかるいろいろのこと

自身の「老」を見て父への理解も深まるのであろう。

第三十八回

全国短歌フォーラム in 塩尻

短歌と出会えるまち「塩尻」。短歌で思いを表現する文化を大切にし、短歌のすばらしさを全国に発信しています。

題詠「食」または「食べる」

※「食」の単語を詠み込まなくてもよい

投稿歌募集　申込締切 6月14日(金)

■応募規定　一人二首まで。自由題一首と題詠歌一首の合計二首(どちらか一首でも可)
題詠「食」または「食べる」
※投稿は自作未発表作品に限る

■投稿料　1,000円(高校生以下 500円)
※一人あたり、一首二首同額

■作品集代　1,000円(希望される方は投稿時にご注文下さい。)

■応募方法　所定の投稿用紙か400字詰め原稿用紙の右半分に作品・左半分に住所・氏名・電話番号を記入し送付ください。
ホームページの応募フォームからも投稿できます。
https://tanka.shiojiri.com
※ご連絡くだされば募集要項(投稿用紙)をお送りいたします。

■払込方法　定額小為替(郵便局で購入)を投稿歌に同封するか郵便局備付払込取扱票で「口座番号00560-6-83649 全国短歌フォーラム実行委員会」にお振込下さい。

■申込締切　2024年6月14日(金)(当日消印有効)

■主催　長野県塩尻市／塩尻市教育委員会／全国短歌フォーラム実行委員会

■選者　佐佐木 幸綱 氏・永田 和宏 氏・小島 ゆかり 氏

■賞　最優秀賞・優秀賞・入選・奨励賞

■発表　作品集と全国短歌フォーラムホームページ

■申込先　〒399-0738 長野県塩尻市大門7-4-3
全国短歌フォーラム事務局
電話 0263-52-0903(直) ファクス 0263-53-7604

三月号作品二評

井上　菅子

刈り取りの済みたる田に焼く籾殻のくすぶり続くけむりと匂ひ　梶尾栄子

籾殻は炎になって燃えるのではなく、くすぶりながら燃えていく。くすぶり続けるのは煙だけではなく、匂いと丁寧に言って臨場感があり、郷愁をそそられる。

風に揺れ雨にも耐へて残りたる柏葉紫陽花くれなゐのいろ　益坂順子

柏葉紫陽花の大きくてたくましい葉は、生命力も強く風雨にも負けず秋になり紅葉をした。結句の体言止めが印象的。

「あけび蔓山ぶだう蔓切る勿れ」名を挙げて立つ大き立て札　小林貞子

蔓細工の材料になるあけびや山ぶどう。勝手に切っていかれる地権者の怒りに目を付けた。大写しの立て札が目に浮かぶ。

二本ある茄子の実毎朝採れたのがおわりとなってさびしくなった　早乙女イチ☆

素朴なつぶやきで成り立った歌だが、実直な作者の人柄が見えるようで、味がある。事実だけを述べているのも好もしい。

地球儀のどこに在るかも解らずにオマーン産のインゲンを買う　卯嶋貴子☆

見も知らぬ国の名を挙げ読者を惹きつけた歌。オマーンは中東の国で、日本からは二十八時間余り。首都はマスカットだという。主婦のある日の一こま。

毎朝の旗ふりに黙つて横断しゐたる子が初めて「おはやう」と言ふ　植松千恵子

交通安全の立哨の場面だろう。他所の子でも、成長を温かく見守っている目の捉えた、初めての「おはやう」である。

水色のワイシャツ粋に着こなしてロビーに君は爽やかなりき　野口秀子

水色は爽やかさ清潔感清涼感など好感度が高い。回想する「君」は誰なのか。夫のことを客観視したのであれば、質の高い作品だと思う。

名刺見てぬくもりさんは「温盛」という二文字の漢字だと知る　永野雅子☆

「ぬくもり」という珍しい名字の、音だけ聞いては正解は出ない。「温盛」の漢字を見て納得する作者がおもしろい。

子を叱る母の言葉のあらあらし隣るベンチに緊張しをり　鈴木計子

「あらあらし」に厳しい情景が浮かぶ。これ以上エスカレートすればどうなるか。「緊張しをり」に、立つに立てない雰囲気がうまく表現されている。

鉢植えを求めてすでに二十年春には香り冬には実り　加藤富子☆

二十年の歴史をもつ鉢植えへの愛着を詠む下の句、香り実りの連用形の畳み込みが調べを整えている。

雪化粧富士はやっぱり美しいひとときなれど災害忘れる　安川敏子☆

富士山への称讃が単刀直入に詠まれ、その美しさに災害のことさえも忘れるという。ためらいのない詠みぶりが潔い。

女の孫の娘に似たる衿あしの衣紋を抜きぬ背伸びをしつつ　西村邦子

孫を見る目の娘に似たる衿あしに、感慨深いものがあるだろう。「背伸びをしつつ」は、今の若い人の背丈を表す。

三月号作品二評

江波戸愛子

突然にテレヴィジョンより聞えくる声の限りの避難の連呼　益坂順子

令和六年能登半島地震は一月一日十六時十分に発生した、この歌はその時の女性アナウンサーの声を詠んでいる。下の句にあの時の避難を繰り返し呼びかける声が聞こえてくるようだ。多くの方々があの声に力づけられたのではないだろうか。

峠道「一木一草採る勿れ」立て札の字の黒黒太し　小林貞子

結句の「黒黒太し」は木や実のなる蔓などを採る人が止めるようにと願って書いたのだろう、効果はあったのだろうか。この峠道の木や花や実を地元の人々が大切にしていることがよく判る。

ばあちゃん出かけようかと誘う孫今日は静かなよい天気だよ　早乙女イチ☆

作者が家族から大切にされているのがよく判る、今日はどこへ出かけたのでしょうか。静かなお天気の良い日に。

この年の吊るし柿百個に難は無く友の教へのテグスの効果　野口秀子

テグスは釣り糸として愛用されているらしい。吊るし柿を鳥から守ってくれたのはテグス、それを教えてくれたのは友であり、友への感謝を詠む。

またひとつ歳を重ねて思うのはやりたい事をやる勇気持つこと　川俣美治子☆

歳が増えるごとにやりたいことを諦めてしまうことがあるが、作者はいくつになってもやりたい事はやりましょうと詠む。前向きな生き方が素晴らしい。

コロナ禍への憂ひ遠のき友からの賀状の添へ書き前向きとなる　松居光子

コロナ禍の規制がだいぶ緩くなってきた。コロナの感染をとても恐れていた友なのだろう。その友の本来の姿の添え書きを嬉しく読んでいる作者がみえるようだ。

着て欲しと小柄なわれに届きたる友のセーターダウンが温し　鈴木計子

婦人衣料の大きいサイズはいろいろあるがMより小さいサイズは少ないように感じる。小柄な作者に合う服を届けてくれた喜びを詠む。結句は、セーターもダウンもそれをくれた友も含めた温しであろう。

新年を寿ぐように輝けり金柑の実は初日を浴びて　加藤富子☆

この金柑は鉢植えと他の歌にあり、この一首に作者が大切に大切に育ててきたことが伝わる。

冷え込む日ガスストーブに手をかざす幼い頃は焚火囲みき　安川敏子☆

ガスストーブに手を温めながら焚火を囲んだ幼い頃を懐かしく想い出している。大人も子供も一緒になって賑やかで楽しい時間だったのだろう、今は決められた場所でしか焚火をする事が出来ないらしい。

夜遅く帰るとメール子がくれて紅白始まり今か今かと　石渡静夫☆

メールをくれたのは息子さんだろうか。夜遅く帰るという時間が互いに違っているのかもしれない。紅白歌合戦が始まりまだ帰って来ない息子さんを待つ気持ちが結句によく判る。紅白歌合戦はああだこうだと言い合いながら見るのが楽しい。

三月号作品三評

桜井美保子

紅葉せるプラタナスの葉強風にまろびて止まり又まろびゆく　佐々木政子

色付いたプラタナスの葉が強い風に吹かれる様を見つめた。ただ吹かれているのではなく僅かに止まる瞬間がある。その一連の動きをすかさず捉えている。

孤立する人々に降る白い雪止んでと願ふ半島の先　松﨑みき子

この度の能登半島地震の報道からの一首だろうか。被害を受けて孤立した状況の中を生きる人々。せめて雪が止んでくれますようにと作者は願う。気持が籠った作品で共感した。

置物の干支の兎に礼をして辰を飾りぬ吾は年女　津田美知子

毎年干支の置物を飾っておられるのだろう。一年眺めた兎に感謝して辰を飾るのだ。「礼をして」に日常を大事に過ごす作者のお人柄が出ている。結句の「年女」で歌が引き締まった。

牧野博士のふるさと館の書棚に並ぶ手ずれも古き植物専門書　水澤タカ子

研究に使われた植物専門書の手ずれの跡に着目した。博士が使った書物を見学者が手に取れるようになっているのだろう。小さな発見を大事に詠んでいる。

鏡餅卒寿までは己が搗くと言ひ切つた時勇気湧きたり　奥山清子

決心したことを声に出し相手に聞いてもらうことで、大きな力が湧いてきた。自分が決めたことを実行する。そうした姿勢が力強く表れている作品。

小雪舞ふ義母の命日の墓参り兄が逝つたとやうやく話す　井上鈴子

身近な存在だった兄が他界。その悲しみと寂しさに耐えていた日々が長く続いた。ようやく義母にお参りして報告したという。打ち明けることで少し作者の心に光が届いたことだろう。

年明けて天災地変が重なりて明るいニュース探すリモコン　山崎　猛☆

今年は元旦に能登半島地震が発生し、甚大な被害が広がった。また各地で大雪の被害もあった。深刻さを受け止めつつもやはり明るいニュースも見たくなる。そんな心情がさりげなく詠まれている。

子ら帰り布団積み上ぐ部屋隅に赤きボールの一つ残れり　塚本節子☆

家族が泊りがけで来てくれた。みんなで楽しい時間を過ごした充実感が感じられる。部屋隅の赤いボールに遊んでいた小さい子供の声も思われる。

手作りは子等褒めくれし昆布巻きと紅白なますの二品となる　金子八重子☆

お節料理の中で家族が待っているのは手作りの昆布巻きと紅白なます。美味しいものは飽きないし、身も心も満たされる。母親としての自負が感じられる。

ほうれん草旨し旨しとリピーターの客にせかされ師走の畑へ　越澤太朗☆

野菜の直売をされているのだろうか。収穫したばかりのほうれん草の味を知った客が何度も買いに来てくれる。「旨し旨し」は作者にとって有難い言葉。忙しくて大変だが嬉しい師走のようだ。

三月号作品三評

橘　美千代

復興の港で踊る権現様中止となりぬ能登の地震に　松﨑みき子

令和六年一月一日午後四時十分頃発生した能登半島地震は今後もその日その時間が来る度に思い起こされることだろう。平成二十三年三月十一日の東日本大震災と同様に。作者は津波被害に遭われた三陸の方であろうか。復興を果たした港で元日に獅子舞の「権現様」が舞われる予定であったが、能登の地震にて中止になったという。被災の地を人々を気遣ってのことであろうが、自身らも十三年前の記憶が蘇り祭り気分どころではなくなったのではないだろうか。

木枯らしの中を飛び交ふ鴎らは船よりこぼれる魚奪ひ合ふ　津田美知子

やはり三陸の海であろうか。生きるため魚を求めて木枯らしの中を飛び交う鴎ら。過酷な自然のもと少ない食糧を奪い合う競争の厳しさが迫る。緊張感のある表現と調べで的確に歌われている。

画仙紙に深呼吸し一礼し今年最後の競書仕上ぐる　奥山清子

上の句の「深呼吸し一礼し」とたたみかけることで作者の緊張感と集中力の高まりを示す。張りつめた時の後は、一年の締め括りの競書を仕上げた達成感と充実感に包まれるのだろう。

クリスマスの近き昨夜の夢のなか孫に贈り物したいと兄は　井上鈴子

兄の死を知らされて作者は、家に来た時や孫の誕生を喜んでいた兄のことが思い出されて。それが昨夜の夢に繋がったようだ。兄を悼む気持ちが胸を打つ歌。

早朝に寒気のなかを急ぎ行くセンター試験の孫を励ます　山崎　猛☆

まったく何故センター試験は毎年最も寒波に襲われる一月中旬に行われるのだろう。雪の多い地方では交通機関のマヒや路面凍結、吹雪などとハンディ大ありだ。インフルエンザやノロウイルスの流行る時期でもある。余計な心理的負担がかかる。根本的に変更すべきでは。

子ら帰りかけっこをする足音の耳に残れり厨の夕べ　塚本節子☆

正月に帰省したお孫さんらが去った後の空虚感が伝わってくる。賑やかだった家うちも静まりかえり、夕べともなれば台所に立つと孫らのかけっこの足音が聞こえるような気がすると。活気の失せた家の侘しさが一際しみる。

この指の痺れは残り治らぬと診断を受くる小指を見つむ　羽田孝輝

小指に痺れが残ると言われた作者。尺骨神経にマヒ等があるのだろうか。すでにマヒが進行した状態では手術しても十分に回復しないこともあるという。医師はあっさりと事実を宣告するが言われた方はショックである。筆者も尺骨骨折後に環指小指の不調があり共感を覚える。

注文の小松菜の種筋蒔きすトンネル栽培寒気にめげず　越澤太朗☆

結句は小松菜のことのみを言っているわけではなく、顧客の要望に応えて厳寒の畑にも勇んで出かけてゆく作者自身のことを表現しているようにも思える。

作品二

祭日の鮮魚コーナーはなやかに並ぶ刺身の盛り合はせなど
ひとりには余るかマグロの刺身盛り切り口の角くつきりと立つ
鮮魚コーナーの刺身の隅に置かれゐる鰤の切れ端パックにふたつ
二パックに詰められてゐる残りもの粗に頭のありて目のあり
鰤の粗ひとつを買ひてなりゆきに任せるやうに決まる夕食
塩を振り日本酒かけて熱湯を注ぎたる粗のたちまち白し
背の骨に指先入れて取りのぞく血はやはらかくかたまりてをり
背の骨も頭も切れずそのままに鍋に寝かせて大根と煮る
煮るときに鍋に入れたる柚子の皮ときをり口に甘くかをりぬ

本　間　志津子　山形

「法然と極楽浄土展」開催は四月半ばと新聞にあり
疫病と天災・戦乱続く世に念仏と極楽説きし法然
ウクライナ・ガザにコロナに能登地震法然在りし世と重なるか
こんなにも青かつたのか雲のなき如月の空光溢るる
莟もつ寒椿の葉艶やかに光を反す道のかたへに

三月号　十首選

冬雷集　益坂　順子

震度七のちに余震の三度四度能登半島
と海ゆふぐれてゆく　大山敏夫
シャッターのあがらぬ店もありながら
歳末商戦福引もあり　赤羽佳年
指先の震へ視力の減退を姉は告げずに
絵筆を折りき　黒田江美子
紅白を見ずに迎へた除夜の鐘一チャン
ネルは昭和のやうす　山口　嵩
丘陵と砂丘のつづく日本海羽(は)昨(くう)の海は
しづまりゐたり　天野克彦
見おろせるこの校庭にいつにても生徒
のすがた見えざる不思議　稲田正康
病むと止む語源は同じ今日もまたセイ
リッシュ海の冬空低し
ブレイクあずさ☆
浮腫(むくみ)とるために手を上げ電灯にかざせ
り壊れ癒えてゆく手を　橘　美千代
爽やかな目ざめの朝は今はなく起きね
ばならぬと励まして立つ　古嶋せい子
夕なぎの海原とほく入りつ日の光りく
だくる霜月半ば（三池港）　姉川素枝子

大空に網の目のごと梢の先広げ聳ゆる槻の大樹は
四万十の河津桜の便りあり春への足音にはかに近し
土砂均すパワーショベルは高校を商業施設に変へゆかむとす
早春賦ふと口遊む冷ゆる日は雛の便りのちらほら届く

石　渡　静　夫☆　茨城

筆記具は一本あれば足るものをペンケースには三十本も
上達はせぬと自ら諦めて師匠の手本を真似する書道
夕食をたらふく食べて少量の日本酒に酔う春兆す日は
土曜日の診療前の待合室物音しない時はゆっくり
雪が消え日常に戻る夕べには拭いきれないけだるさ残る
昨日の雪が嘘かと思うほど晴れてミモザは西風に舞う
健康の秘訣は民謡を踊ること九十歳の役員は言う（大民踊大会）
休憩に各県のデモンストレーション衣装鮮やか動ききびきび
大会の最後の曲は炭坑節歌手も大御所大塚文雄

東　ミ　チ　青森

「日本のうた」テレビに合はせて歌ふ声聞き慣れてネコは逃げずに眠る
正月に茶碗蒸しに入れ余りたるユリ根の一球を深鉢に植ゑる
何故か少女期ばかり浮かぶなり馬鈴薯主食の一家の団欒
母つくる馬鈴薯餅の旨かりき食糧難の頃の恋しく
我が猫の抜け毛の掃除はダスキンのモップが最良品目は猫費用とす

三月号　十首選

三月集／残響集　山口　嵩

日差しある空はしだいに雲を帯び夕暮
れの空雲催ひをり　本間志津子
色褪せたる新聞スクラップ整理せむ捨
て難き記事あり写真あり　東　ミチ
付箋切らしゼムクリップを代はりとす
けふのところはこれで間に合ふ
佐藤靖子
その表現どこから降りて来るのかと問
いかけてみる孫と短歌に　藤田英輔☆
出刃包丁慣れぬ手つきで持つ息子見真
似で捌く六キロの鰤　藤田夏見☆
だんだんと聞き取りにくい左耳テレビ
の音が三十を越ゆ　吉岡松世
除湿器の水を静かに捨つる夜ふと思ひ
出す母の介護を　佐藤幸子
大掃除真似事にせり独り居は蛇口とシ
ンク磨きて終はる　小田原禮子
年明けにこと多くして悲しきをわれ年
女霊験あれよ　立石節子☆
大雪で立ち往生する車列の報聞く我の
空雲ひとつなし　片桐美穂子☆

デイサービスにて呼ばるるわが名「ミチさん」も耳に馴染みて笑顔に帰宅す
背格好が去年と違ひて若く見ゆると友の言葉に気分よくゐる
店内に流るるメロディー「雛祭」カート押しつつつい口ずさむ

佐藤　幸子　山形

枝先に付きゐる赤き木瓜の芽が今朝の霧氷を纏ひ輝く
冠雪の蔵王の山が夕映えてむらさきの光放つを見たり
走りゆくバイクの音の軽やかに雪国二月の雪なき景色
四十五年製品作りし工場を首振り倒すユンボの一打
幾年月なりはひ支へし建屋跡に見る雪山の清しき景色
花粉飛ぶ杉の老木切り倒し鴉の塒を奪ひてしまふ
ことことと煮込むシチューに白ワインひと回し入れ子の帰り待つ
子の居りて安堵する夜あす朝の早出を思ひ声かけて寝る
冷凍庫の何処かに隠れてゐるはずの蕨を探すもう春が来る

須藤　紀子　埼玉

春の雨霙に変はりはらはらとフロントガラスに散りては消ゆる
一羽かと思ふ間もなく椋鳥の大群降り来て枯野を漁る
土竜塚この原に今夥し家族揃ひて土掘り居らむ
作物を作らぬ畑を広々と紫に染め仏の座咲く
僅かなる段差の前で躊躇する老いたる犬をそつと押し上ぐ
甲斐犬の激しき気性忘れ果て生きてえらいと褒められてゐる

三月号　十首選

作品一

石渡　静夫

太田先生歌ひたまひし赤羽の稲付はわが生まれしところ　桜井美保子
冬日差し明り障子に長く入りベッドに入る昼寝も楽し　飯塚澄子
ベッドから四、五歩で行けるトイレにもナースコールする空しさにいる　斉藤トミ子☆
悲惨なニュース多すぎて笑顔になれる話題は大谷翔平　浜田はるみ☆
新聞が朝夕とどく有りがたさしみじみ思ほゆ年の始めに　倉浪ゆみ
といふ訳なのよが口癖とふ我を真似て幼児言ひゐきしばしば　稲津孝子
歌作りは机が要るねと買ひ呉れし亡夫に詫びつつ専ら食卓　大塚照美
初冬の儲け日と言ひて温き日差しの中に媼らの会話の長し　井上槇子
学生の頃に短歌を詠み合つたあなたの歌をそらんじてみる　中島千加子
新しきパジャマは軽くて暖かしこの幸せに一夜眠らん　山本三男☆

老犬のシーツ取り換へ終るころ朝刊配るバイク近づく
ケージ飼ひの鶏の悲惨知りてより平飼ひ卵をせめて贖ふ

佐藤　靖子　東京

青信号皆でわたるも怖しき世となりたりや桑原桑原
朝の日に向きていそげば風寒し西にもどればあたたまる背な
何といふ名の風なのかミモザの枝いたぶりをれど強き黄の色
山道の柏若葉に燦として大き青虫われを通さず
花びらを散らすさざんくわ花落とす椿それぞれ雨をいろどる
キッチンのお玉はくせもの水切りをあの頭もてすると抜け落つ
夜半に覚めまた眠るまでいつときを明かるき思ひよぎることなし

早乙女　イチ☆　栃木

「母さん雨降つてるが買物に行きたいのだろ」長男が言う
今日もまた柚子がおちてるひろつて来てお風呂に入れて香りたのしむ
キンカンがほしいと言つて友が来る生つてる枝を切つてあげるね

鈴木　計子　東京

会食の代はりと言ひてこの年も義弟からの節重届く
届きたる節重われの手作りと並べて撮りてはじまる新年
味みばえ藝術品なる節重の品書き見つつかしこみ頂く
勿躰なき品品ならぶお重より補充きくわが重に箸のぶ
合唱と器楽の調べとけあひてほどよき会場バッハに包まる

三月号　十首選

作品二

大塚　亮子

大海を泳ぎたかつただらうにと片口鰯の田作りつくる　梶尾栄子
靴底に付きてきたるかいちまいのもみぢ葉のあり運転席に　益坂順子
暖冬に冬眠できぬ熊がゐて空腹抱へ里へ下りくる　小林貞子
地球儀のどこに在るかも解らずにオマーン産のインゲンを買う　卯嶋貴子☆
真夜中に吹く風音は故郷の屋敷畑の風音に似て　野口秀子
浮かびたる一首をスマホに書きとめつ釣りたる魚を逃さぬやうに　松本英夫
着て欲しと小柄なわれに届きたる友のセーターダウンが温し　鈴木計子
仕舞いたる富嶽図床の間に飾り年男だねと遺影に語る　児玉孝子☆
一粒を丸ごと口に放り込む自然のままの金柑の味　加藤富子☆
女の孫の娘に似たる衿あしの衣紋を抜きぬ背伸びをしつつ　西村邦子

響きあふ器楽と合唱とけあひて降るごと湧くごとバッハを奏づ
脚を組み装飾光るつけ爪に菓子食ぶる人ここは車内よ
隣席に抱かるるをさな父親のコートの下にわれ蹴る頻り

卯　嶋　貴　子☆　東京

歩くこともままならない夫に食事の取れない日の続きおり
食事が取れるようになりたる夫は少しずつ元気になって歩きはじめる
今年も確定申告をする夫は書類を整理して役所に行きぬ
徒歩五分の役所まで杖をついて書類を提出にでかける夫
鉢植えのハエトリソウは一冬をわがベランダで無事に越したり
家の中に置くカニサボテンはこの頃の春の兆しに生気出でくる

植　松　千恵子　静岡

金書記の地震見舞は意外なり儀礼であつても国交の縁に
恵方巻豆まき終はればひな祭り正月後の行事足早に
懸念する地球ではなく月までも領土争ひの的とならんこと
暖冬はありがたいやうで心配す酷暑日照り夏の異変を
災害時素早き援助の働きに日本に生まれた幸せ思ふ
相手見て指と表情で意志伝ふ手話は声より魂こもる
なくなればいいもの武器と独裁者悪徳宗教麻薬や貧困

三　好　規　子　神奈川

CT検査を待てば「コードブルーCT室！」くり返す放送に医師ら駆け付く

三月号　十首選

作品三

天野　克彦

紅葉せるプラタナスの葉強風にまろびて止まり又まろびゆく　佐々木政子
濃淡のグレーの雲に覆はれて雪ちらちらと海に入りゆく　津田美知子
段差ある室で男孫は立ち止まりゆっくり確かめ進むを見たり　高藤朱美☆
地震にて家族不明のテレビ見て自分の頬を抓ってみるなり　山崎　猛☆
元旦の能登の地震に驚きぬ七尾の友はいずこにいます　笠岡文子☆
朝あさに二人の女孫の髪を結うそのひとときに心充たさる　塚本節子☆
冬至からまだ四日しか経たぬのに日脚延ぶるを感ずる夕暮れ　羽田孝輝
手作りは子等褒めくれし昆布巻きと紅白なますの二品となる　金子八重子☆
ほうれん草旨し旨しとリピーターの客にせかされ師走の畑へ　越澤太朗☆
電車にて二つ折りした新聞を読む人見ればなぜか安らぐ　首藤文江☆

CT検査のわが前の人の急変に集まる大勢の医師や看護師
CT室より寝台車にて目を瞑る嫗が急ぎ運ばれ行けり
造影剤点滴準備を受けながら運ばれたる人が頭をよぎる
心臓は八十四年を休まずに拍ち続けをり当然なれど
ウクライナのボルシチを真似てビーツ入れ娘が煮込めば深紅に映えて
ウクライナの五世帯八人に週一度子は菓子を焼く生甲斐ならむ
ウクライナの警察署長の姉弟の母が来日し束の間の団欒

山　本　述　子　神奈川

本年は河津桜の格別に輝くやうに咲きてくれたり
この桜見せてやりたき者ありぬしみじみ眺む橋の上より
雛の節句に手巻き寿司食み偲びをり遥か昔の段飾りなど
早朝のテレビ体操続けをり今日もお陰で心身軽し
命日を覚え呉れたる友のゐて共に墓参して二万歩達成す
ドライブに誘はれ半日半島を巡り改めて見応へ感ず
半島の湾それぞれの風景に荒荒しさと優しさのあり
空の青海に写して澄みわたる風のみ強く白波刻む

藤　田　夏　見☆　広島

「アオハルは不条理なのよ」と孫の来るコップ酒飲むわたしの隣りに
アミエビの干したるものを搗き込みてチーズと焼きぬ桃色の餅
膝の腫れ養生ののち萎めどもわたしの筋肉衰えきたる

歌集／歌書御礼

編集室・佐藤靖子

■上村典子歌集

『アペリティフの杯』

令和五年十一月十六日発行、四三〇首を収めた第六歌集。より進化した歌を作るための精進をアペリティフにたとえているらしく、作品にもおいしそうな食べものの歌が楽しませてくれる。例えば次のように。

十八時ウニホーレンを食しつつ白のワインに無軌道となる
飲み口ゆライム一切れおとしこみコロナビールの壜かちあはす
天童の〈雪漫々〉なるひや酒や朝祝ひとて封を切るべし
身に着けるものの歌からは粋を感じる。
水仙の二輪のゐまふ塩瀬帯締めて元旦出汁をひくなり
夏ごろも吉弥結びに帯しめて根付の鈴をチリンと鳴らす
生き死ににつながる歌。

また元の筋肉までは望まぬが笹百合の咲く山にゆきたし
揺れやまぬ竹の林に虎落笛西の空より風花の舞う
如月の峠の道は風の道頬を刺しゆく風花連れて
冬越しの琉球あさがお青き葉は一畳半の手作りハウスに
晴れの国の如月の空に聳え立つ山城目指す杖を頼りに（備中松山城）

小林貞子　山形

道端に鼬一匹轢かれをり雪催ひする日の夕つ方
いがぐり坊やカメラにきりり目を向けて青長靴で三輪車
いがぐり坊やの三輪車の旅よその庭誰が撮りくれし古き一葉
からからと軽きハンドル味噌搗き機出で来る豆の手触り優し
豆三升糀多目の塩少な今年の夏を堪へておくれな
パソコンの画面のカーソル時に飛びキーを打つ指未だ迷ひ指
角丸き携帯電話の手に馴染み相棒として二十と余年
バッテリー未だ余裕あるガラ携の一年後に来る電波打ち切り

川上美智子☆　高知

飛んで来て冬枝揺らすヤマガラを間近に見てる思わぬ出合い
懸命に羽繕いするヤマガラの仕草に見惚るときめきながら
花見時疾うに終わりたる白梅の微かに香るそよ風吹けば
用はないが声聞きたしと掛けてくる長夜の電話は老々介護の友
控え目な愚痴を受け止め聴きおれば何時しか友も小さく笑う
三和土にはうらがへりたる朴歯下
駄君の早世比喩して言へば
運蕎麦と夫の故郷の呼ぶ習ひまこ
と運かな年越ゆるとは
著者の素の部分だろうか。
くちごもりつまづきおほしつたな
くてちひさき心にマスクありがた
し
口紅を塗らぬ春秋くちびるはしづ
かに老けてテレビにわらふ
選者の仕事など日日の作業の開封と
いう地味ながら大切なことが、良い雰
囲気の歌になる。著者も鋏も読者も安
らぐ次の作品。
郵便配達なくなり土曜を安らかに
鋏のねむる机のはしに

（音叢書　本阿弥書店刊）

■野田雅子歌集

『見上げて』

令和五年十一月二十日発行、四七一首を収めた第一歌集。

おだやかに始まり、最後まで静かな歌集、表面はそのように見えるが実は著者の、表に出さない悲しみ、自身の

高台より見下ろして思う住む人も家も古りゆく我が町の未来
南海の地震に遭えばこの町も同じ被害ぞ能登の人等と
胸塞ぐ能登の惨事の映像がテレビ消しても我が眼に残る

大野茜　神奈川

息抜きにカステラ食べる午後三時下校の生徒のじやれ合ふ声する
コロナ禍をインフルエンザは潜みゐてチャンス到来とこの冬蔓延
パワハラとふ言葉知らずに仕事して上司の叱咤を愛と応ふる
ベッドに寝る兄が好みの大判焼枕辺に置けば微かに笑ふ
支柱立てきぬさやの種パラパラと蒔けば蔓の絡む日は直ぐ
九十にあと数ヶ月の妻が友絵文字を寄越す夜の十二時
夕食のデザートに妻が好物の干柿ありて会話途切れる
雀来て千両の実を食べるから先手を打ちてネットで覆ふ

江藤ひさ子　大分

二月二十二日二十二分スマホの表示奇跡の瞬時
近寄りて快き香に目を閉ぢつ白き水仙早朝の庭
咲き盛るラッパ水仙今年また向かひに隣に配る楽しさ
九十二歳劣化の一途わが体けふの唐突抜けたり奥歯
わが寿命計り知れねど抜けたる歯の修復急ぎ掛け込む歯科医
移動の都度吾の小走り強風のコートに励むグランドゴルフ
グランドゴルフの調子上々ホールインワン一ゲーム二回は吾の二回目
生きていく力が湧いてくるように感じられる一冊なのである。生活のリズムが平穏なころの作品から。
ガスタンク林檎の皮を剥くように
解体さるる下からぐるりと
御子息入院、手術が前進の第一歩、それが終わって。
さるすべり紅白に咲く家の前通り
て帰る退院の子と
再入院が終わって。
長かりし子の入院の終わりたり午
後のぽかりとあきて戸惑う
御息女入院。
一向に熱の下がらぬ子を見舞い帰
る空き地にたんぽぽ盛る
面会に通う日日なりウオーキング
瞑想読書の時間をかねて
山法師の花盛りなり供花かと道に
見て過ぐひと月たちぬ
子らの死の事実となりて日常に溶
けこみゆくころ家柿供う
ほかに。
水槽に泳ぐを石斑（うぐい）・追河（おいかわ）と指差す
夫の狩野川育ち
語らざれば憂い無きに似たりとう

彼の日この時　松本英夫　東京

ポストまで上着わするるあたたかさ霧たちこむる春分の朝
形見なる時計を見つつバス停へ急げば夜に義父の現る
脱水へずずんずずんと回り出し今日も二人のひとひの始まる
梅雨空にすることなければ食ふために生きるかのごと昼どきの来る
まじめなる父すわり笑む母の見ゆ夏の夜明けの窓明るみて
朝刊を取る道すがら蚊に刺さる老いたる我に旨み残れり
秋雨は夏の暑さを洗ひ去り肩をすくむる十月五日
火の迫りシューター辛くも地につきて残れる客の声のはじけり

児玉孝子☆　愛知

年明けて畑に行けば大根もかぶも遅まきなれど育ちおり
収穫の蕪早速に浅漬けにして朝食に添えれば旨し
年老いて身長縮むしかあれど老健検査に三年変らず
伊豆に行くと誘いくれるに案ずるも家族三人の気楽さに甘ゆ
大鳥居くぐり浅間大社前歩みて詣づを幸と神殿に
西伊豆の民宿の夜の海の幸匠の技に味わう晩餐
東京に雪降り東名閉ざされて一号入るに魔の大渋滞
のろのろと車に埋まる一号線出るに出られず寡黙となり耐う

小嶋知葉☆　茨城

わが街のフレンド会の企画なる映画は「ミステリと言う勿れ」
詩句をかざりぬ窓辺の棚に
ちぎれ雲寄り合いてまた離れゆく
このごろ空を見ること多し
絵や編物太極拳庭の世話、それらの
歌からも生活人の健康なエネルギーを
感じた。

（長風叢書第308篇　いりの舎刊）

歌会設立こと始めの次第

新井光雄

踏み出してしまった。「歌会グループ」の設立結成である。八十路の小さな冒険いや暴挙かもしれない。それでも歌を詠み出して概ね二十年。ここまできたかという多少の感慨もまたありで、まだ、スタート段階。今だからこその次第を書いておきたいと思った。

「歌会グループ」など、少し構えて表現したのには訳がある。普通、これまで体験、参加してきた歌会には「指導者」、「講師」、「先生」という存在が

解きほぐす事件の謎と人の心新感覚にとまどい覚ゆ
ピアニスト小林愛美の演奏はまなこを閉じて華麗に弾けり
ショパンの幻想曲に「オルゴール」と題名をつけ弾くピアニスト
紅色の花弁を重ね群れて咲く木瓜のはなやぎ心にとどく
伝え聞く神話の化身か水仙はくれなずむ庭に白く浮かびぬ
父方と母方の従姉亡くなりてもう語れない思い出ばなし

豊田伸一☆　茨城

朝の障子にちよこまか映る影ありてじっと見ていて鶯と知る
ふきのとう今年は早く香り良しもらいて近所におすそわけする
晴天の日の続きいてベッドより時折り庭へ視線を移す
通院に介護タクシー手配してスロープ使い車に乗りこむ

安川敏子☆　埼玉

膝痛め只歩くだけ進むだけ杖をたよりに真剣勝負
眼・耳・歯と年々故障が多くなり頼みの足も千鳥のようで
病院の混み合う季節の花粉症マスクにゴーグル支度は万全
雲動き予報はずれて青い空予定変えずに小さなため息
風もなく早咲き桜満開で双子のベビーカーゆっくり進む
春告げる沈丁花の香に弾む気が快復早める幸せな朝
老いた今母の匂いの赤飯と誕生日の膳懐かしくなる
年一度カサブランカのプレゼントその数多く感動したり

（☆印は新仮名遣い希望者です）

ある。一種の歌教室が多かった。それがない。いない歌の場はなんと言えば良いのか、少し迷い、「歌会グループ」としてみたのだ。それでも落ち着きがよくないかもしれない。「歌グループ」あたりの方が良いか。いずれにして、指導者のいない「歌会」を立ち上げる結果となり、その事の次第を知ってもらいたく思ったのだ。

前置きが長くなったが、この二月に短歌を出し合って批評・鑑賞を楽しむ、ささやかな会が世田谷の一角でスタートした。参加者九人である。かろうじての人数かもしれない。初回ということで精一杯だった。当方が全くの偶然で柄にもなく、歌会創立、結成に関わることになったのは、多少の経緯がある。前段があった。

実は当方はある音楽慰問団に所属していた。十人ほどの慰問団でハーモニカが中心、ほかにアコーディオン、オカリナなど。当方はギターで参加していた。向かうは老人施設で、週二回ほど。極めて熱心な慰問団だった。練習は月一回。場所が準公共施設だった。

作品三

三月の寒さに驚き気が滅入り何もしないでストーブの前
春先は養殖ワカメの水揚げに海上走る船は急ぎて
ソーラン節踊る祭りの懐かしき長い髪結ひしわれは海の子
雪積り家々の屋根白くなり眩しき一日雲ひとつ無く
日本酒を好んで飲んだ亡き父の膝の上には眠る猫居て
畑に入れる肥料買ひたる夫の日記段取り良くてまるで農家だ

松　﨑　みき子　岩手

臥龍梅の樹齢四百五十年八重咲きの紅を観て四十年
コンビニは歳時記の如し啓蟄の前にビールの桜のラベル
ヨーグルト占ふ如く蓋めくる今朝はつまみに「付着せぬ蓋」とあり
サッと茹で葉の水扱き分葱巻くわが手の動き母に似て来ぬ
豌豆の殻の中には秩序あり左右交互に実付き納まる
大震災の「あの日」は帰宅難民にて中野サンプラザのロビーに寝ねつ

小田原　禮　子　福岡

握手
意識なくひたすら眠り病む友の部屋の窓撃ち春の一番
春一番友の知るはずなきものを起きろと言うかに窓に激しく

新　井　光　雄☆　東京

施設はその練習所を中心に徒歩、バスで行ける範囲だったのだが、コロナ禍。活動の「慰問」が皆無となる。ゼロだ。月一回の練習も全く力が入らなくなってしまった。参加人数も自然減、昨年末に前代表から解散の提案があり、仕方なしとなった。

そこで当方が手を挙げてしまったのだ。確かに慰問はもう出来ないだろう。出来る環境になっても今度はこちらが対応できない。しかし、練習の「場」がもったいない。なぜならその場は通常、簡単な手続きで恒常的に借りることができる。それも無料。「場」として余りにもったいない。活用したいと思い、活動内容の変更で、引き継ぎの了解を求めたところ、了解となり、「歌会」を始めてみることにした。「場」の管理団体にもむろん、了解を得た。形が整ったのだが、さて、具体的にはどうすればよいか。

会員？は我のみだ。慰問団の面々は難しいという。そうだろう。楽器から短歌へ。簡単ではない。会員集めは当方一人でしなければならない。必死の

見えてるか見えてないのか目を開き右手が一瞬ＯＫサイン
親指と人差し指の丸サイン俺だ分かるか此奴の癖だが
この右手東大時代はギター部員かなりの弾き手と評判だったに
一人きりで呼吸器の音聴くだけで友の顔みる時間の重く
無念なる姿を晒すは望むまい別れの時と友の手をとる
手に力あったの感触錯覚か最初で最期の友との握手
釈迦を恋ひ桜は観ずに旅立たんメールに遺す辞世の一句

水　澤　タカ子　山形

遊歩道を跨ぎて仰ぐアコウの木たこ足のごとき気根に触れぬ
輪島塗りの屠蘇器を供へ修正会を終へていただく御酒をみんなで
夕暮れのくつろぐ頃に能登半島を襲ひたる大地震にただ息をのむ
朝市に交はしし言葉やはらかき輪島に戻れもとの日常
七尾より山形に勤めし僧ありき冬の寒さに如何におはすや
百までを生きむ夢にて野を行けば林檎の芽吹きわれを励ます

奥　山　清　子　山形

小雪降る一月半ば牡丹の芽わづかにふふむ薄紅に
窓越しに寝ながら仰ぐ北の空煌めき揺るる星を数へむ
透明な傘を雨水流るるを下より覗く今日はプラの日
個展せる友の絵記念に求めたり代金は備への「能登半島地震支援」箱に
赤白のミニシクラメン咲き揃ひ郵便局の軒下飾る
飾らるる享保雛の鮮やかさ写真なれども旧柏倉家の

気持ちになる。これまでの歌の付き合いに頼るしかない。やってみた。やはり簡単とはいかない。場所が遠い。もう二つの会にはいっていて三つ目は無理。日程が合わないなど。理由は様々だが、現実とはそういうものだ。初回だけなら「お祝いに」という人もいた。ただ当方の強みは会場探しの労がないこと。さらに師、教師、先生がいないので、上納がない。会費は不要だ。事実上の「無料歌会」。さもしいがこれを少し強調して、再度の呼びかけ。それに司会方式であり、会員全員平等を訴え、あれこれ呼び掛けると、なんとか九人が二月の初回に集まる。一応、合格である。五人以上が「場」の利用の条件らしい。

しかし、もう一つ問題がある。具体的な会の運営である。当方、これまで六つの歌会に所属してきたが、共通の問題は「作品集めの方法」だ。結社の定例会などは歌誌があるから問題なし。そうでない場合が結構面倒。メンバーの誰かが責任を持って、作品の歌を集めて整理する必要がある。二十年

暖冬にて降らぬを天に謝しをれば弥生に入りて続くぼた雪
井上鈴子　山形

甥と子に鰤大根を炊きて待つ兄の釣りたる鰤にあらねど
人形教室に兄の作りし内裏雛飾る甥と子に春の日の差す
柿二本残すと甥は雪のなき畑に脚立で剪定始む
点眼し眼科に待てば甥のメール霞みて見ゆる合格の文字
合格を直接伝ふと子は座り灯明揺れて兄は穏やか
途中まで記帳の兄の朱印帳引きつぐ甥は熊野へ出向く
津田美知子　岩手

体型の変らぬ夫は五十年前に仕立てたる背広着て行く
義姉達が赤飯煮しめ持ち寄れば「何から食べるべ」と迷ふ義母の手
小雀は水を飲まんと入りたるやバケツの中に溺れもがきをり
幼き頃職持つ母は編み機もて吾のセーター作りくれたり
日本一の富士の山には川の無く雨も雪も裾野に湧き出る
吾が夫の名を忘れたる母百歳「思ひ出せずに御免ネごめんネ」
春雪の湿りて重き雪かきの筋肉痛は三日後に出る
谷田律子☆　栃木

小鳥達水も木の実もない大寒に正月飾りの南天ねらう
寒風に一輪咲いた梅の花一雨ごとに春来るを待つ
梅の花咲くを待ちつつ庭を見る今年は未だ蕾も硬し
この痛み起きればなおる仕事痛天地返しの二月の土おこし

前に学士会館で初めて参加した歌会はPCメール方式。十人足らずのメンバー全員がPCを使うので、歌会用の作品五首をメンバー全員に送信する。各自はプリントアウト、会に持参する。これは労力の分散、負担は個人だけ。これはこれでいいのだが、PCをしない人がいるのが普通で、どこでもとはいかない。

幸い今は入っているもう一つ歌会もほぼ全員がPCやるのだが、ここは一人の人に作品を二首集中送信、まとめてもらって返信で受け取り作品をプリントアウトする。さらにもう一つの会は指導者のところに、手紙、ハガキ、あるいはPCで、作品を送り、それを指導者がPCでまとめ、印刷。郵送で会員に返し、歌会に持参となる。ここのところが、いずれにしても難問となる。なんせ当方は年でもあり手間が面倒、楽にやりたい。作品まとめだけは是非とも避けたいと困った。

が、ある案に思い付く。俳句、句会方式の歌会への転用である。いや、当方の経験不足で歌会でもやっていると

喜寿にして食事の店する義妹は頭も足もダメだとなげく
目白たちもみじの枝に十数羽下げたる飯をついばみている
立石節子☆　東京

新しき歳始まるも事多く静かに時を過ごすことなく
遅く咲き頭を垂れて枯れ庭の塀陰に群るるクリスマスローズ
見解に同じ信仰もつ身でも人間ゆえの仲たがいあり
ニュースソースの違いのあれど真実は一つと思うテレビを見つつ
カステラをレシピ通りに捏ね合わせ焼きあがるまで歌を練るとき
髙藤朱美☆　茨城

暖かき部屋で蕾はぷっくりと育ち色付くピエールドゥロンサール
水耕のヒヤシンスの花ピンク色真白き根長く伸びて眩しく
久々に深夜に流るるギター曲懐かしくなりて眠り忘れる
葡萄棚剪定すれば腕痛し見上げる空の広くなりたり
目を細め自転車を漕ぐ女学生小雪舞う朝すれ違いたり
六人の生日ありて如月にライン飛び交う新年のごと
塵からの自分ありきと受けとめむ神父は十字を吾の額に
井出裕子　静岡

正月の事故を憂ひつつ久々の飛行機の旅に心華やぐ
流氷を見る長年の願ひ叶ふれば感謝を伝ふ同行し呉る友に
アイヌの村亡き母と訪ひし遠き日を思ひて歩く雪降る広場
墓を参り周囲の草を抜きながら母の好みし蒲公英残す

ころがあるもしれない。言ってみれば「短冊出詠方式」とでもいうということになるか。

俳句は会によって微妙にやり方が異なるが、経験の範囲でいえば、出句は短冊だ。細長い紙。ある句会では広告用紙裏をつかっていた。いずれにしても、その短冊に句を書き、持参。それを会員に順次回す。会員はそれをテイクノートする。コロナ禍で、一度集めてパソコンで全作品を印刷ということもあったが例外だろう。

筆写が原則である。出句はこれも句会にもよるが二句から五句。　これを歌会でやろうというわけである。作品持参。短冊、そして筆写である。作品収集の作業がない。筆写の用紙は原稿用紙を拡大コピーしてこちらで用意した。短歌はミソヒト文字だから一首三十一字。十人だと三百字強か。短冊には当方が番号を書く、これを会員に書写してもらう。時間は十五分程度ですむ。面倒と言われそうで、事実、それを言う人が初回にはいたのだが、作品収集の面倒を説明して理解しても

誰もゐぬ父母の墓所に声出して近況報告す愚痴も交へて
亡き父母の建てたる小き墓に見ゆ慎ましやかな二人の生き方
小さくも凛然と立つ父母の墓むかへば伝はりくるもの多し

山　崎　　猛☆　埼玉

若き日の試験で覚えし赤彦の歌は今でもすべてが言える
信濃路の歌は赤彦故郷のその感傷は吾もかさなる
初午と友からメールは遠い日の的屋の笑えるバナナのたたき売り
団地内のいつもの場所に仲買の魚売る声の聞かれずなりぬ
「早春賦」散歩の道に聞こえ来る肌さす風は菜の花ゆらす
同窓会の知らせ送れば返信に余命三ケ月と短く戻る
珠洲市より集団避難の中学生吾が就職のときと重なる

羽　田　孝　輝　山形

春近き弥生となれる今頃に春はまだだと吹雪に荒れる
すぐそこに春待つ三月九日は吹雪に荒れてもさもさ降りぬ
昨日まで春めく野辺は真白なるもさもさ降りぬ啓蟄の朝
白鳥は冬らしくなきこの冬に長居できぬと帰り急ぎぬ
白鳥は雪なき田んぼに群れ遊び北行く力蓄へてゐる
残忍の限り尽くせるプーチンを神は何ゆゑいつまで許す
プーチンに恫喝されて沈黙する世界に苛立ち二年が経ちぬ

笠　岡　文　子☆　広島

ドジャーズの大谷結婚おめでとう多く語らず妻守る意志

らった。

ただ、問題はある。筆写は確かに面倒だから出詠は一人一首が限度となる。二首は相当大変だろう。それに会員がこの方式だと十人程度が限度になる。それ以上では写し書きが重労働になる。やっと集まってもらった会員、十人以上はダメは贅沢だから、そうなってからの検討とすればよいのだが、気にはなる点だ。会員が多くても少なくても困る。厄介だ。

さて会の実際は、となると司会は当方がさせてもらうことにした。僭越は承知だが、呼び掛け人であり、会の冒頭に「講師なし」。「会費なし」。さらに「互選なし」を宣言した。当面を条件に司会を引き受けることにした。あくまで司会だ。短冊には名前を書かないから作者は分からない。その場の出詠であり、司会にもわからない。後は順番に読み上げての評となる。ここも工夫した。座った席が順番になるのが普通だが、それでは余りに機械的。番号カードをつくり、出詠の時に取ってもらう。これだとアトランダム。多少

目の前の河津桜とスイーツに会話はずみぬ元気な児らと
紫陽花は冬の衣をぬぎながら青い芽いだき春をむかえる
ナワリヌイ氏の勇気ある妻ユリアさん真実を胸に闘い続ける
国連の安全保障は機能せずロシアとイスラエルの戦争はてなし

塚　本　節　子☆　茨城

鳥一羽さえも見かけぬ冬の田につくば颪の渦巻きており
亡き母のセーター纏う叔母の辺に座れば母似の声温かし
氏神の祭りの縁日初巳の日飯名神社の階（きざはし）上る
参拝者に一時間毎に紅白の餅を撒きたり神社の氏子は
万葉の歌に詠まれしつくば嶺の男体女体の霊峰やさし
境内を流れる男女（みなの）川支流にて福を呼ばんと銭を洗えり
肉・さかな何も無けれど高菜漬香りも食みぬ炊きたてご飯に
龍ヶ崎トマト売り場の大だるま両目描かれて何を見つめる

越　澤　太　朗☆　茨城

東京湾デスク並べて眺めし友が終の住処は茨城となる
常連の親友逝きてしまいたる囲碁の教室手どまりとなる
茨城の国民宿舎「鵜の岬」に徹夜で打ちし囲碁の思い出
碁敵の微笑む遺影を前にして「もう一番」の手合せはずむ
「紅はるか」今年は自前の苗づくり籾殻苗床準備始める
「きたあかり」ジャガの農家は早植えと芽出し種芋畝に並べる
春野菜大根・小松菜共に播きトンネル外すタイミング待つ

の彩りとなったかもしれない。変化球だろか。

最後は作品を当方が家に持ち帰りパソコンに打ちこみ、印刷し、次回に会員に配布する。本当はこの配布を会の時にできればよいのだが、会後で我慢してもらうつもりだ。まだ、一度しか配布していないが、印刷された作品をみて、喜んでもらえたように思う。試行錯誤だ。まだまだ改善点はいくらでもあるのだろうが、開催の継続が第一。出てくる評がきつくならないようにも注意している。それにこの手法は自分の作品を自分で評するような場面がありうる。その時は澄まし顔で評してほしいと伝えた。事実あった。

こんな具合にこの歌会は歩きだした。まさに一歩であり、どこまで歩けるか。心もとないのだが、下心としては、当方も八十路である。早くも誰かが、この「場」を継承してくれないか、ということがある。　目下の悩みは会費だ。「無料宣言」をしてしまっている。会費なしでもいいのだが、短冊、書写紙、作品印刷など多少の出費がある。

首　藤　文　江☆　埼玉

こんなにも予定を入れる嬉しさを噛み締めながら手帳を開く
回復し遠出ができた褒美かと思う春一番の風優しくて
どうしても行かねばならぬ用事ありお構いなしに雪降り積もる
北風に土埃舞う畑道に時報を告げる「故郷」の曲
何となく春の香りを嗅ぎたくて草餅求め菓子店覗く
夜更けて布団敷く手をふと止める遠く聞こえる救急車の音

永　井　享　子☆　東京

霜降りる屋根の間を直線にひよどり達が飛びかう朝
白梅も紅梅も咲き暖かき風を呼び込み心が躍る
低空を飛ぶ飛行機の圧迫感グンとせまりくる鉄のかたまり
犬猫も日なたを探しまったりと幸福感じ昼寝するかな
雪降りて寒さと重さ耐え忍ぶのらぼう菜達は元気に伸びて
ひよどりが毎朝来てはのらぼう菜をついばみてゆく役に立ったか

会を終えて、せめて珈琲一杯程度は、という要望もあり、どうするか。会員の提案で一回百円。年会費千二百円ではどうか、となる。

これでも安めの珈琲は飲めるし、印刷用紙代なども十分だ。幸いにもその「場」にはガスコンロなどを含め調理設備が完備している。使用しない手はない。「会費あり」とするか。いずれ継続していくうちにスタイルが出来てくるのだろう。司会もこの人という候補がすでにいる。負担にならない歌会。「短歌サロン」のような「場」に成長していくことを願うばかりだ。

これが「歌会こと始め」の次第となる。

了

原稿募集

編集室では、会員の皆様から左記のテーマによる原稿を募ります。

記

●島木赤彦の一首鑑賞
皆様が赤彦作品ならこれを選ぶという一首について自由にお書きください。

●先ず作品一首を二行分でお書き頂き、その後に、＊本文　25字×17行でお願いします。末尾にお名前を入れてください。

●締切日は、毎月15日とします。
＊尚、掲載について細部はご一任願います。

●宛先は編集室。

冬雷ホームページのネット歌会に参加しよう。希望する二首を選んで、事前に申込みます。活発に動いています。　（広報係）

編集後記

▽本号から作品欄のレイアウトが一部変わった。作品の下の部分に十首選や文章が組み込まれた。頁数を少なくして印刷費を節減するための対策とのことである。

▽まずは編集長の編集方針を信頼して、赤字の危機を徐々に乗り越えていきたい。従来の頁数の多い誌面よりコンパクトな感じになるが、中身は濃く充実感がある。

▽巻頭の《ＤＴＰで「冬雷」を作る》が最終回を迎えた。冬雷編集室のすべての作業が画像入りで丁寧に解説されており、大変貴重な連載だった。将来、仮にペーパーレスという新時代に切り替わったとしてもＤＴＰで雑誌のデータを作ることは必須だそうだ。こういう面からも考えてみると、雑誌の運営に組版技術は今後も必要不可欠と痛感した。（**桜井美保子**）

▽作者にとって思い入れある建物が破壊される歌に心惹かれた。青木さんは、隣りの素晴らしい庭のある大きな家が、主が亡くなると容赦無く壊される様を活写。本間さんの高校がパワーシャベルで破壊され商業施設に変えられてゆく歌。佐藤さんは四十五年営んだ工場がユンボの一打で倒されたと。消滅してゆくものへの哀惜の情。

▽誌面のレイアウトが変更された。こんな手もあったのかと感心した。雑誌制作費圧縮のための工夫。宅配費が高騰する中ペーパーレス化も浮上する。（**橘　美千代**）

▽巻頭の連載が最終回となった。半年以上に渡りおつきあい頂き感謝申し上げる。ああいう技術も、実際に自分で動かしてゆかないと真に身につくものではないので、なるべく早い時期に担当者の交替へ舵を切りたい。

▽目次上の「お知らせ」の通りに主に作品欄のレイアウト変更を行った。過剰な粉飾を除外し、シンプルに徹した。気分転換だと考えて貰えれば有難い。

▽皆様から原稿を募っている「島木赤彦の一首鑑賞」だが、お陰様で順調に集まり始めている。到着順に掲載してゆくので、投稿は歓迎する。（**大山敏夫**）

▽二〇二三年十一月号から連載された《ＤＴＰで「冬雷」を作る》が最終回となった。七ヶ月をかけて丁寧にデータの制作過程が解説された貴重な資料となっている。ふんだんに画像を取り入れての解説なので分かり易いが大変な作業であったと思われる。冬雷では二〇〇六年からデータの内製化を進めているので編集長は毎月このような作業をして雑誌を作って下さっているのかと感謝の思いが湧いてくる。

▽いつも原稿を送る時はできる限りのことをして余計な手間をかけないようにしたいと思っているが手書きの方も続け字をしないで楷書で丁寧に書いて下さるよう改めてお願いしたい。

▽入学式の頃に咲いていた桜の開花が年々早くなって今年も彼岸の頃の開花が予想されていた。楽しみにしていたが直前になり猛烈な北風と真冬のような寒さが続いて足踏み状態である。最近は急に起こる予想外の気象の変化に振り回されているような気がする。

▽三月は年度替わりの月ということもあって日曜日の例会会場を確保できず担当の森藤さんに他を探して戴いた。やっと金曜日の西大島総合区民センターがとれて初めての平日歌会であったが駅に隣接している会場でゆっくりと歌に向き合えて充実したひと時を過ごすことができた。（**小林芳枝**）

▽御寄附厚く御礼申し上げます。
吉田綾子・津田美知子

▽誤植訂正。お詫びします。
三月号32頁　乾義江氏6首目
思い残れども×→思い遺れども○

▽今月も『作品年鑑』の校正を委員が集まって行います。

《冬雷規定・掲載用》

一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）

一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九　小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）

一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。

一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。

一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。

一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。

一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七大山方」とする。

一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。

一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。

＊会費は原則として振替にて納入する事。

A	作品三欄所属会員	一四〇〇〇円
B	作品二欄所属会員	一七〇〇〇円
C	作品一欄所属会員	二〇〇〇〇円
D	維持会員（二部購入）	二六〇〇〇円
E	購読会員	八〇〇〇円

一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はＢ５判二百字詰め タテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
・担当　大山　敏夫
作品一欄　・担当　桜井美保子
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）
・担当　小林　芳枝

一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。

一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Ｅメールでの投稿案内》

白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。

一、Ｅメールによる投稿は左記で対応する。

大山 敏夫　tourai-ooyama@nifty.com
小林 芳枝　k.yosie@nifty.com
桜井美保子　mihoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》大山　敏夫　350-1142 川越市藤間 540-2-207　☎ 090-2565-2263
小林　芳枝　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409　☎ 03-3604-3655
桜井美保子　235-0022 横浜市磯子区汐見台 2-2-2-608　☎ 090-6029-0590

2024年5月1日発行

編集発行人　大山　敏夫
データ制作　冬雷編集室
印刷・製本　㈱ ローヤル企画
発行所　冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話　049-247-1789
事務局　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替　00140-8-92027
ホームページ　http://www.tourai.jp
頒価　700円